

多賀城市文化財調査報告書第2集

山王・高崎遺跡発掘調査概報

昭和 56 年 3 月

多賀城市教育委員会

序

近年、新産都市圏の発展・拡大とともに、本市にも急激な人口増加の現象が現われて来ている。

本市には、特別史跡「多賀城跡」を中心とする多くの埋蔵文化財が存在しており、特に西部地区に大規模な遺跡が知られている。最近、西部地区も次第に宅地化現象が顕著となり、埋蔵文化財と係わりあう件数も増加している。

今年度発掘調査を実施した山王遺跡と高崎遺跡は、国庫と県費補助を受けて行われたものであり、数多くの成果をあげることができた。特に、山王遺跡は、はじめての本格的調査であったが、古墳時代～江戸時代末期にかけての遺構や多量の遺物が発見された。また、高崎遺跡は本市の中央公園計画地内の調査で、丘陵地に遺構が存在するか否かの確認を目的として行ったものであるが、合口甕棺が発見されるなど、貴重な遺構が存在していることが明らかとなった。

今回の発掘調査の成果を報告するに当り、調査にご協力された地主賀川邦雄氏、発掘に参加されたかたがた、東北学院大学生諸君、関係各位に対し深甚の意を表するとともに、本市の歴史を考える資料の1つとして活用いただければ幸いに存じます。

今後とも、文化財に対するご協力とご理解をお願い申し上げる次第です。

昭和56年3月

多賀城市教育委員会

教育長 玉 蟲 謙

目 次

序 (多賀城市教育委員会教育長)

例 言

山王遺跡

I 調査体制	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査経過	5
IV 発見遺構	8
V 出土遺物	22
VI まとめ	39

高崎遺跡

I 調査体制	59
II 立地と環境	59
III 調査経過	61
IV 発見遺構	63
V 出土遺物	65
VI まとめ	65

例 言

1. 本書は多賀城市教育委員会が、昭和55年度の国庫補助事業として実施した山王遺跡・高崎遺跡の発掘調査の結果をとりまとめたものである。
2. 本報告書を刊行するに当り、遺物整理が終了していないため、事実関係の記述を中心とし、説明は概略的に記述した。そのため、本書を概報として報告することとし、後日本報告書を刊行する予定である。
3. 本書の執筆は、調査を担当した社会教育課主事高倉敏明、滝口卓、白石直子(嘱託)、が分担し、編集は高倉が担当した。
4. 遺物の実測には、東北学院大学生石本敬、大久保政勝、芳賀英実、村田晃一、相沢清利、浜本哲栄、庄子敦の協力を受けた。
5. 遺構・遺物のトレースは滝口、石本が行った。石製模造品の表は白石が作成した。
6. 出土した土器の実測図は150点を上回るが、本書にはその一部だけを掲載するにとどめた。また、瓦・陶磁器については、東北歴史資料館藤沼邦彦、多賀城跡調査研究所高野芳宏両氏の御教示を受けた。

山 王 遺 跡

(山王字西町浦地区)

I 調査体制

1. 遺跡所在地 多賀城市山王字西町浦 95-2, 95-10, 96-3
2. 調査期間 昭和55年6月5日～昭和55年11月30日
3. 調査主体者 多賀城市教育委員会（教育長 佐藤 力）
4. 調査担当者 多賀城市教育委員会社会教育課
担当職員（主事）高倉敏明、滝口 卓、（嘱託）白石直子
5. 調査員 石本 敬、芳賀英実、大久保政勝、神成浩志
(東北学院大学生)、高橋勝也(仙台市立歴史資料館)、
鈴木惣之助(城南小学校教諭)
6. 調査参加者 伊藤専治、菊池善雄、及川勘次郎、伊藤武右エ門
阿部由之助、後藤久次郎、阿部米子、鈴木哲子、
熊谷あつ子、後藤はつみ、阿部美智子、赤間かつ子、
後藤恵子、鶴巻まき子、阿部はるみ、佐藤勝子、



第1図 地図

高橋 きくよ、柏倉 霜代、工藤 昌子、矢内 佳子、
阿部 正義、庄司 和幸、桑島 克憲、桜井 淳逸、
多賀城市立第二中学校郷土史クラブ（顧問 丹治 英一教頭）

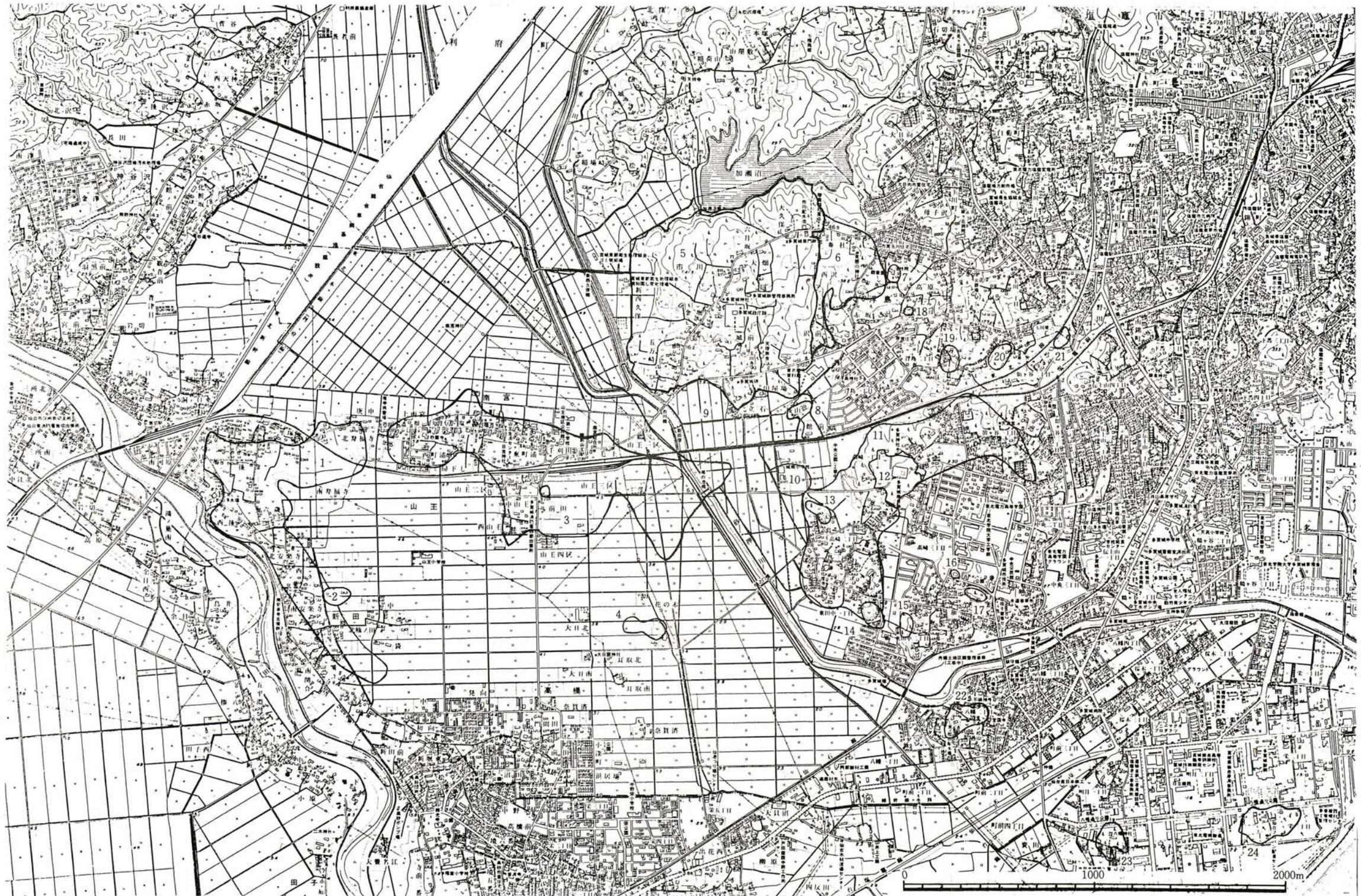
II 遺跡の立地と環境

山王遺跡は、多賀市の西部地区山王および南宮を中心とする東西1700m、南北 700mにわたる広範囲に位置し、旧七北田川の自然堤防上に立地した遺跡である。遺跡の中央部は岩切から塩釜方面へ通じる県道が横断しており、その両側に街並が形成されている。さらに、南と北側は水田地帯になっている。今回発掘調査を行った場所は、山王字西町浦地区の賀川邦雄氏宅南側畠地である。調査地の南方約 100m には国鉄東北本線の線路が横断しており、周辺水田部はしだいに宅地化されて来ている。

本調査区の北東方向約 1.5kmの丘陵上に多賀城跡政庁跡が所在している。

本市に所在している遺跡の大部分は、多賀城跡周辺地域から西部地区にかけて密集しており、大規模な遺跡が多い。山王遺跡は、その中心部に位置しており、東西両側に市川橋遺跡、新田遺跡が隣接している。新田遺跡は、仙台市との境を南下する七北田川に添って細長く位置しており、北部は山王字北寿福寺にかけて広く所在している。この遺跡も山王遺跡から続く自然堤防上に立地しており、ほぼ全域に遺物が散布している。新田遺跡は、かつて発掘調査が行なわれており南小泉式の土師器や石製模造品が発見されている。また、その他にも須恵器や土師器片が採集されている。

市川橋遺跡は、多賀城跡の西側から南面一帯に広がる水田部に立地している。この遺跡は、これまで数ヶ所の発掘調査が行なわれており、多賀城跡に関連する遺構が発見されている。また、高崎丘陵上には、多賀城廃寺跡やそれを包含する高崎遺跡、丸山団古墳群などが所在しており、多賀城跡南東方向約 200m には館前遺跡が位置している。



第2図 遺跡分布図

表1 遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	新田遺跡	新田	自然堤防	集落跡	古墳・奈良・平安
2	安楽寺遺跡	新田	夕	寺院跡	古代・中世
3	山王遺跡	山王・南宮	夕	集落跡	古墳・奈良・平安
4	大日北遺跡	高橋字大日北	夕	散布地	奈良・平安
5	特別史跡多賀城跡	市川・浮島	丘陵	国府跡	夕
6	西沢遺跡	市川・浮島	夕	散布地	夕
7	法性院遺跡	浮島	丘陵中腹	散布地・寺院跡	夕
8	館前遺跡	浮島	分離丘陵	官衙・館跡	平安・中世
9	市川橋遺跡	市川	沖積平野	集落跡	奈良・平安
10	高平遺跡	浮島・高崎1丁目	夕	夕	夕
11	高崎遺跡	高崎1・2丁目、留ヶ谷1丁目	丘陵	寺院跡・館跡・集落跡	奈良・平安・南北朝
12	特別史跡多賀城廃寺跡	高崎1丁目・2丁目	夕	寺院跡	奈良・平安
13	高崎古墳群	高崎2丁目	丘陵麓	高塚古墳(円)	古墳
14	東田中窪前遺跡	東田中1丁目	夕	散布地・館跡	中世
15	志引遺跡	東田中2丁目	丘陵	夕	奈良・平安・鎌倉
16	稻荷殿古墳	中央3丁目	丘陵(麓)	高塚古墳(円)	古墳(後)
17	桜井館跡	中央1丁目	丘陵	館跡	鎌倉
18	高原遺跡	浮島字高原105	夕	散布地	奈良・平安
19	小沢原遺跡	浮島3丁目	夕	夕	夕
20	野田遺跡	留ヶ谷	夕	散布地・館跡	奈良・平安・中世
21	矢作ヶ館跡	留ヶ谷2丁目	夕	夕	奈良・平安・鎌倉
22	八幡館跡	八幡2丁目	夕	夕	奈良・平安・中世
23	八幡沖遺跡	八幡・宮内1丁目	平地	散布地	奈良・平安
24	東原遺跡	栄3丁目	砂堆	夕	夕

III 調査経過

発掘調査対象地域の下草刈りと清掃を行ない、調査区内中央部にある道路を挟み東区と西区に分け、調査基準杭の設定を行ない東に3mのグリットを設定する(6月6日)。調査地域の遺構確認を行なう目的で、東区E列の表土剥離を行ったところ、東西に走る堀跡を発見した(6月11日)。東区及び西区の表土剥離にバックホーを導入する。遺構検出作業に入り、東・西両区から小柱穴群、溝、土括などを検出した(6月19日)。東区で竪穴住居跡を発見する。西区で検出したピット群、土括群の掘り込み調査を開始する(6月30日)。

日)。多賀城第二中学校郷土史クラブ（顧問丹治英一教頭）が一週間の予定で調査に参加する。溝の掘り込み調査を始める。県文化財保護課氏家課長、扇課長補佐外5名が来跡する（7月23日）。西区全体の清掃、全景写真の撮映を行う。西区北壁セクション図を作成した後、遺構の実測図作成のため遣り方を設定して平面図の作成に入る。この間東区の堀跡、小柱穴群の掘り込み調査を開始し、北壁セクション図作成を行なう（8月15日）。東区中央部の確認面を精査したところ、2間×3間の掘立柱建物跡を発見し、SB01とする。SB01周辺南北に走る溝の掘り込み調査を開始する。東区東側の湿地状落ち込みより、古代の井戸跡を発見し、掘り込み調査を行ないセクション図を作成する。水田部の調査を行なう（9月5日）。西区平面図作成、レベル測定を終了する。東区の堀跡と西側の堀跡の関連を確認するために東区堀跡の西側を拡張し、確認面まで掘り下げたところ、木製の樋を発見する（9月8日）。東区の遺構実測図作成のため遣り方を設定し、平面図作成を開始する。東区の遺構全景、SB01、堀跡の写真撮影を行う。西区は、井戸跡とみられる土括群のセクション図の作成と溝の掘り込みを行なう。東区の平面実測図作成、レベル測定を終了する（9月16日）。現段階の遺構確認面である黄色の砂質土層中に多量の南小泉式土器が含まれているため、古墳時代の遺構の存在が予想されたが、現露出面上での遺構確認が困難なため黄色土（L—4層）を約3cm程度掘り込み、遺構検出作業を行う。SB01南側の竪穴住居跡を1号住居跡とし、掘り込み調査を開始する（9月18日）。SB01建物跡周辺で検出した竪穴状遺構を2号住居跡とし、東区の東北部の埋甕をとりまく竪穴状遺構を3号住居跡として掘り込み調査を行なう（9月20日）。20号溝に切られ木炭を含む遺構を発見し、東側を1号遺構、西側を2号遺構とし、掘り込み調査を開始する。SB01建物跡西側で発見されていた竪穴遺構を3号遺構と変更する（9月24日）。現地説明会を開催し、調査成果を一般に公開する（9月27日）。1号～3号遺構の平面図、セクション図を作成する。2号遺構、4号遺構、5号遺構の調査を行なう（10月3日）。SB01建物跡の中央部に6号遺構を発見する。1号住居跡西側に木炭を含む土括状遺構を2基検出し、東側のものを7号遺構、西側のものを8号遺構とし、調査を行なう。また西側で検出した南北に走る溝状遺構を9号遺構とし、掘り込み調査を行なう（10月8日）。1号住居跡に切られた木炭を含む27号溝を10号遺溝と変更する（10月11日）。3号遺構の第2木炭層出土遺物の平面実測図を作成する。また、5号遺構西側で検出した11号遺構、12号遺構の調査、及び6号遺構南側で発見された13号遺構の調査を行なう（10月17日）。これらの遺構の平面図を作成し（10月23日）、3号遺構第2木炭層出土遺物の取り上げを行なう。井戸跡の平面図、側面図作成を行なう（11月10日）。西区は遺構平面図の補足を行ない、調査を終了した。東区は、3号遺構東側で発見された灰層のある溝状の14号遺構の調査を行ない、3号遺構、14号遺構及び遺構出土遺物の平面図、並びにセクション図を作成して東区の遺構の



第3図 調査区位置図

調査を終了した。調査区の埋め戻しをバックホーにて行ない、今回の調査の全てを終了した（11月28日）。

IV 発見遺構

今回の調査で発見された遺構は、遺物が多量に出土した楕円形状及び溝状の遺構14基、住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡30条、土拡3基、井戸跡27基、堀跡1条である。

以下にその概要を記述する。

1号遺構

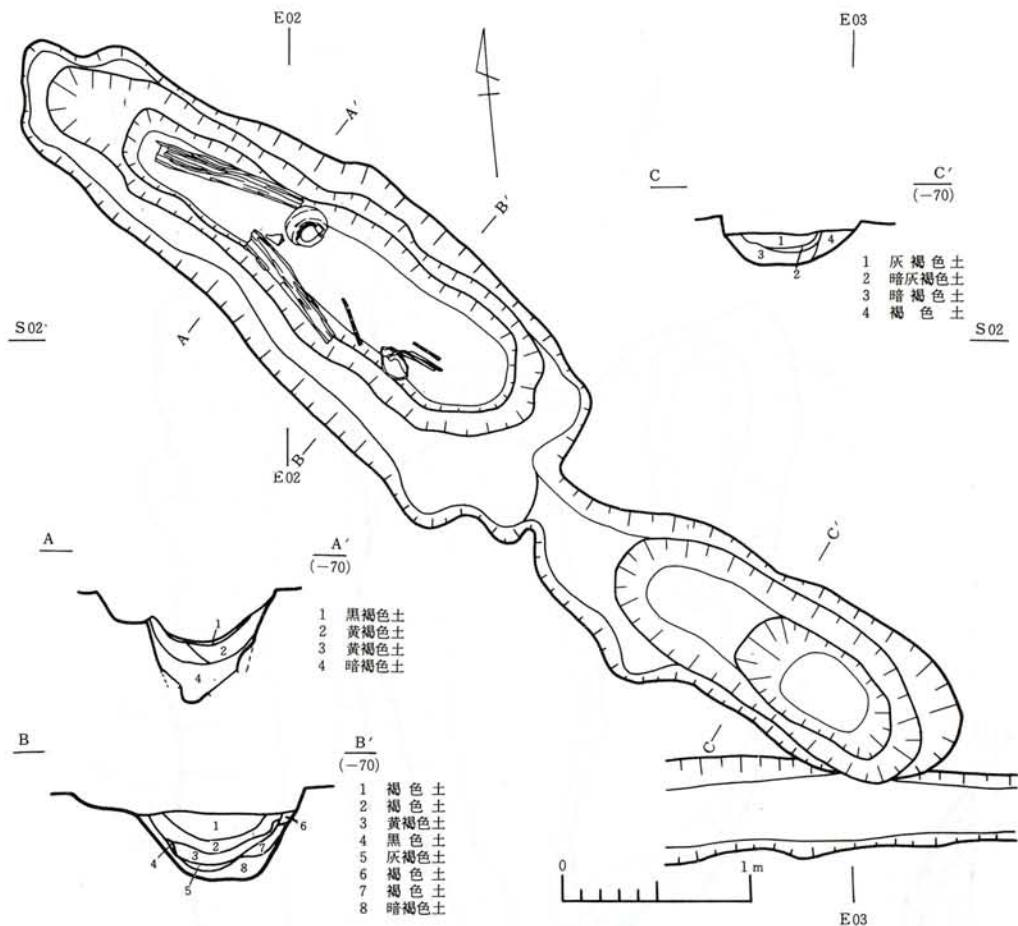
東区西側の1号溝北側に隣接して検出したものである。遺構は南側を1号溝により削平されている。さらに中央部を20号溝で切られているが、床面までは到っていない。平面形は短軸が85cmの長い楕円形を呈し、主軸は北西方向をとる。2号遺構に比べ小形である。構造は、一度浅く掘り込んだのちに長さ1.89m、幅68cmの楕円形を呈する土拡状の掘り込みを行ない、さらに長さ93cm、幅45cmで土拡に掘り込んでいる。底面は船底形を呈し、床面全体に木炭がみられた。堆積土は4層に区分したが、大別すると2層になり、第1層が灰褐色、2層が褐色土であるが、第1層と第2層の間に木炭の間層が見られる。出土遺物は土師器杯、高杯、甕、埴が主で、他に石製模造品（円盤形）と臼玉、ガラス玉が出土している。

2号遺構

この遺構は、1号遺構の長軸線上の北に接して検出されたものである。1号遺構同様20号溝によって西側上部が掘り込まれている。主軸を北西方向にもち、長さ3.6m、幅は南側で1.2m、北側で70cmを計る。深さは約65cmで断面形は概して「U」字形を呈するが、床面は中央部で幅約40cmの平坦面をもっている。壁は、西側が溝20で切られているが、東側でみると、約60度の傾斜をもって立ち上がっており、粘質の黄褐色土のしっかりした面をもつ。

覆土はレンズ状堆積を呈しており、第2層の褐色土、第3層の木炭を多量に含む黄褐色土から遺物が多く出土している。また、最下層から土師器壺とともに木板材が、中央部西壁添いと北側東壁添いに2枚発見され、その南側にも小片ではあるが木材片が検出された。

本遺構から発見された遺物は、土師器壺、高杯、杯、甕、石製模造品3点が出土している。



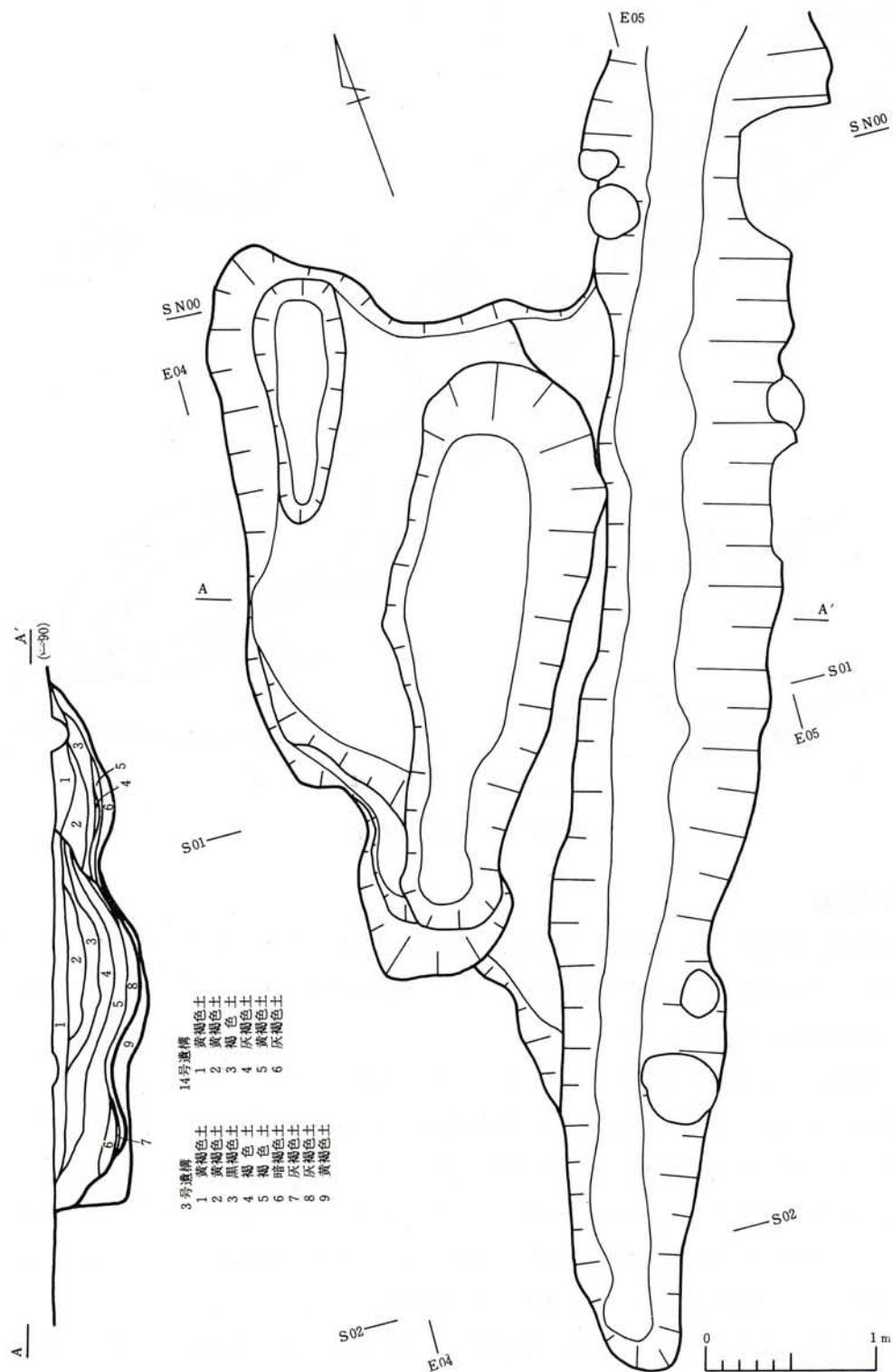
第4図 1・2号遺構

3号遺構

本遺構は、調査区のやや西寄りの北壁近くから検出されたものである。遺構確認面上では、ほとんど本遺構の存在を予想できずにいたが、壁面に添って分布する木炭粒の発見からこの遺構を検出するに至った。

3号遺構は、ほぼ南北に長軸をとり、南から北に幅員を広くするフラスコ状のプランから南端部に張り出しをもつ。長さ4.2m、幅は北側で2.3m、南側はくびれ部の手前で1.4m、張り出し部で80cmを計る。遺構の内側は二段に落ち込み、床面は緩やかな「U」字形を呈する。長楕円形状の落ち込みは二ヶ所にみられ、東側のものは長さ3.3m、幅は中央部で1.2m、西側のものは北西部に位置し、東側のものと50cmの間隔をもっている。長さ1.4m、幅は北寄りで約50cmを計る。深さはともに確認面から約50cmを計る。

覆土は6層に分けられる。第4層と第6層に木炭を多量に含む黒褐色土があり、両者の中間及び第2層は確認面と同質の褐色土が堆積している。第1層は木炭粒を僅かに含む灰褐色土、第3層は炭化物を含みやや粘性のある黒褐色土である。これらの土層はレンズ状



第5図 3号・14号遺構

の堆積を示しているが、第2木炭層（6層）は、床面の起伏に添って底面にだけ認められ、自然堆積とは考えられない。

遺物は第1木炭層の第4層以下から多量に発見された。特に一段下がった落ち込み部上に多く、その出土状況から据えられたものと考えられる。土器の器種は、杯・高杯・壺・小形壺・甕等であるが、朱塗りの施されているものと高杯が多いことが注目される。また、これらの土器に混って、縹縷文土器が破片で1個体出土している他、石製模造品（円盤形）2点、臼玉7点、琥珀玉7点、黒耀石のフレーク数点が出土している。

6号遺構

東区中央部において検出し、第4層を約5cmほど掘に込んだ面で確認した。本遺構は、SB01の柱穴や小柱穴によって削平され、さらに、溝によって削平を受けている。全長は北側が調査区外に延びるために明らかではないが、確認された長さは7.58mで、最大幅は1.58mを計る。南側で段が見られ、底面は船底形を呈し、壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。堆積土はレンズ状に堆積しており、9層に区分できたが、基本的には6層で、第1層が黄褐色土で、確認面の土色と同じである。第3層から第6層までは木炭層と灰層が互層になっており、埋土中より、土師器杯・高杯・甕・壺が多量に出土し、他に石製模造品（円盤形）臼玉が発見されている。土師器は第6層より多く出土している。

7号遺構

調査区の南方、1号住居の西側に検出された遺構である。平面形は長径180cm、短径70cmの楕円形を呈し、深さは30cmである。断面形は「U」字形を呈している。堆積層は5層に大別される。第3層はしまりのない灰層であり、その下層には壁面から床面にかけて木炭を多量に含んだ第5層が堆積している。

遺物は、土師器甕・杯・高杯などが出土している。

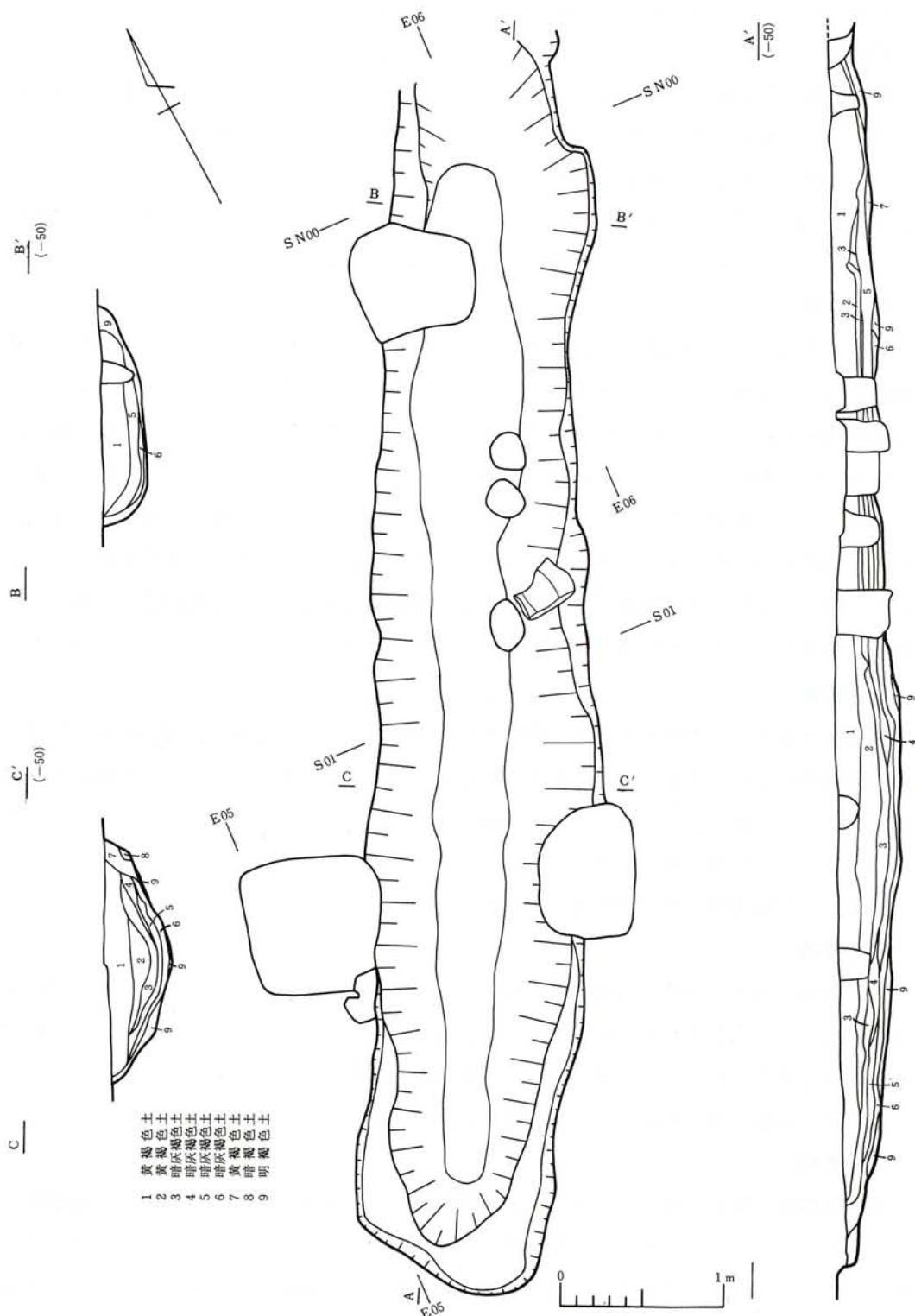
8号遺構

7号遺構の西側に近接して検出されたもので、平面形は長軸170cm、短軸150cmの隅丸方形を呈しており、深さは30cmである。遺構の北側は1号溝によって切られている。断面形は底の平坦な「U」字形を呈している。堆積層は8層に分けられる。

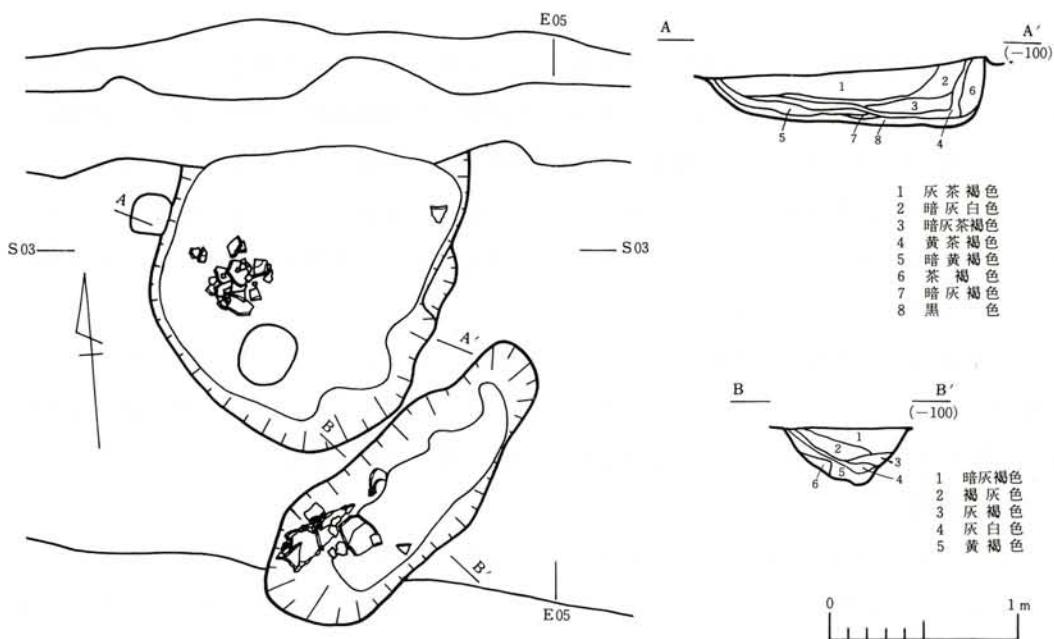
遺物は土師器の甕・高杯のほか石製模造品（円盤形）、臼玉などが出土している。

14号遺構

東区SB01の西側で検出したもので、西側の壁は3号遺構に切られ、東側ではSB01の柱穴や小ピットによって切られ、床面まで掘り込まれている。大きさは北側が調査区外に延びているため全長は不明であるが、確認された長さは7.86m、最大幅1.82mを計り南北に細長いものである。深さは最も深いところで約40cmである。底面は船底形を呈し、南側はしだいに浅くなっている壁は緩やかに立ち上がっている。埋土はレンズ状に堆積して



第6図 6号遺構



第7図 7・8号遺構

おり、6層にわけられる。木炭を多量に含む灰層が2層みられ、この2層の間に黄褐色土が入っている。埋土中からは土師器の杯・高杯・甕・壺が出土し、他に石製模造品（円盤形・剣形）、臼玉が出土している。さらに、滑石の原石と剝片、黒耀石の剝片も出土している。遺物は第2灰層より多く出土している。

他の遺構

前述した土括状遺構の他にも木炭層がみられる遺構があるが、ここでは各遺構の概略の説明だけにとどめたい。

4号遺構は2号遺構西側で検出した、幅約70cm、深さ約20cmを計る細長い溝状の遺構である。埋土はレンズ状に堆積し、木炭層より土師器杯、高杯、甕、壺の破片が多量に出土している。また埋土中より石製模造品（円盤形）が出土している。

9号遺構はE区西北部S-B02の中央部で検出した。幅は約90cmで南北に走る溝状の遺構である。多量の木炭と共に土師器杯・高杯・甕が出土しており、さらに臼玉が6点出土している。他に石製模造品（円盤形）がみられた。

10号遺構はE区中央部で1号溝と堀跡の間で検出した。遺構東側は1号溝と1号住居跡によって削平され、東側は堀跡によって削平されている。残存の長さは約6.2mで、幅は42cm、深さ約60cmを計る東西に細長い遺構である。木炭層は3層みられ、第3木炭層より多量の土器が出土している。出土遺物は土師器杯・高杯・甕が主で、他に石製模造品（円盤形）がみられた。

盤形)が出土している。

11号遺構は**S B01**北側で検出し、第4層を約10cm掘り下げた面で確認した。径約1.4mの楕円形を呈している。深さは約30cmである。木炭層より土師器杯・高杯・甕・埴が多量に出土し、他に獸骨がみられる。埋土中から石製模造品(円盤形)が出土している。

12号遺構は11号遺構東側において検出し、第4層を10cm掘り下げた面で確認している。確認した遺構の長さは約2.3m、幅72cm、深さ16cmを計る。遺物は木炭層上面より土師器杯・高杯・甕が出土している。

13号遺構は6号遺構南側で検出されたものである。1号溝により一部削平されているが底面までは到っていない。長さは4.55mで、幅30cm、深さ42cmを計る。堆積土中には木炭層と灰層が見られる。出土遺物は土師器杯・高杯・甕の破片が出土している。

1号住居跡

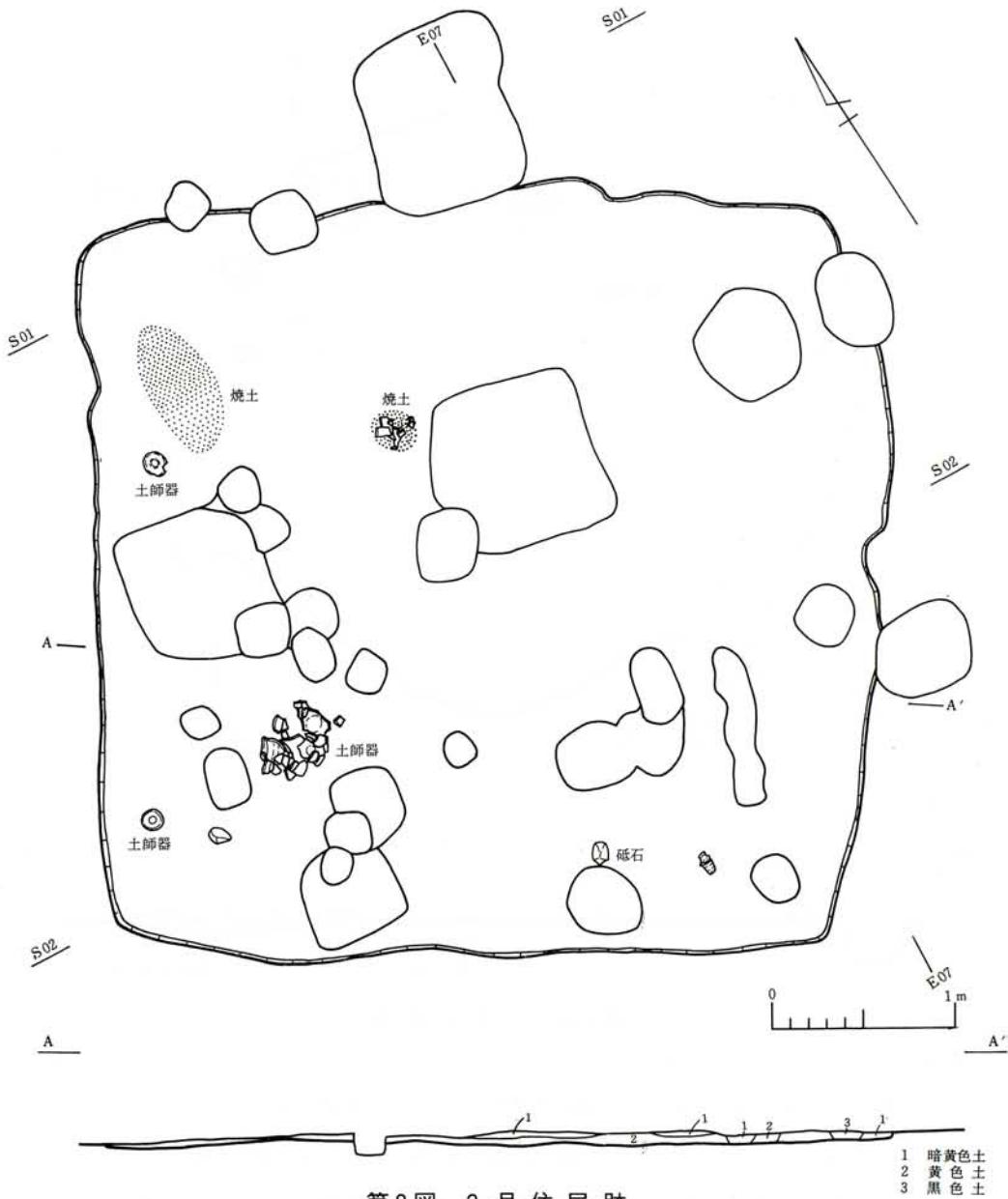
2号住居跡の南西方向約2.5mに位置し、1号溝と堀跡に画された平坦部に検出されたものである。住居跡の南側は堀跡により削られているため全体の規模は不明であるが、東西の長さは約2.6mであり、小規模な住居と思われる。深さは北壁で12cm程である。床面は固く叩き締められている。カマドや柱穴などは検出されなかった。床面上から須恵器、土師器片が出土した他、木製椀とみられる漆幕1個体が発見された。また、床下層から朱塗りの高杯が出土している。

2号住居跡

調査区の中央部に発見されたもので、溝や小ピット、1号建物跡と重複関係をもつている。本住居跡の規模は南北4.2m、東西4.3mで方形のプランを呈している。方向は西壁でN30度東に偏している。残存の深さは約5cm程度で、床面はほぼ平坦である。床面上は後世の建物跡柱穴やピットなどで掘り込まれているが、住居跡北西部に焼土の散布が確認された。建物跡柱穴の両脇からは焼土とともに土師器片が出土している。その他床面上から出土した遺物は、西壁寄りに土師器杯・甕・石製模造品(円盤形)3点、南東部より高杯脚部1点、砥石1点が出土している他、石製模造品の未製品(剣形)2点と臼玉1点が出土している。

3号住居跡

3号住居跡はE区の一段下がった東北隅部より検出された。遺存状況は非常に悪く、東側を4号土塹と堀跡に切られており、西側は19号溝によって切られている。北側はかなりの削平を受け壁は残存していない。南側に若干の壁が残っているだけである。規模の大きさは、南北2.9m、東西3.2mを計り、隅丸方形を呈すると思われる。堆積土は床面上の2層が木炭を多量に含む黒褐色土である。床面はほぼ平坦でありしまりがないが床面東側に焼土がみられ、焼土の周縁は硬質である。東側床面上に土師器甕が3点据えられており、そ

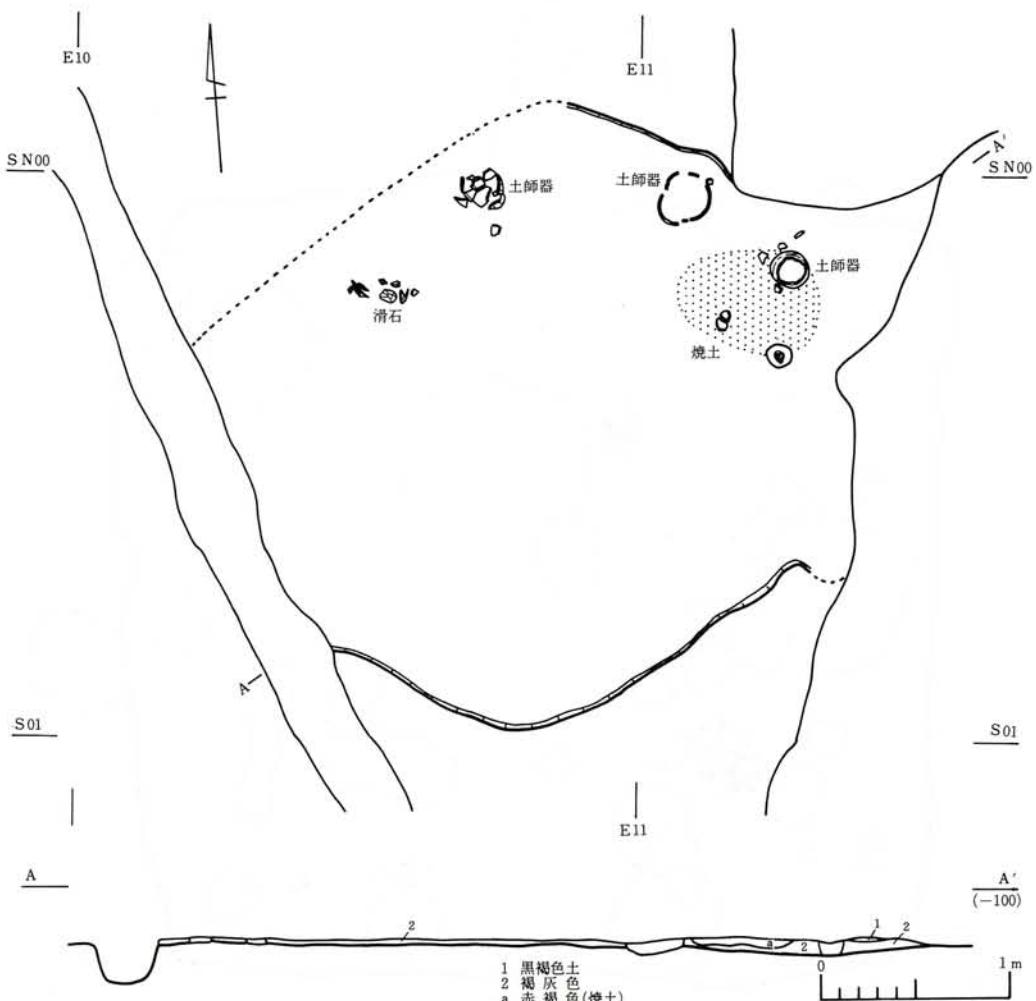


第8図 2号住居跡

のうちの1点が焼土の中に埋め込まれた状態で出土している。また石製模造品の原石とみられる滑石と、滑石の剥片が床面の北側から発見され、さらに甕の中からも滑石の剥片が出土している。

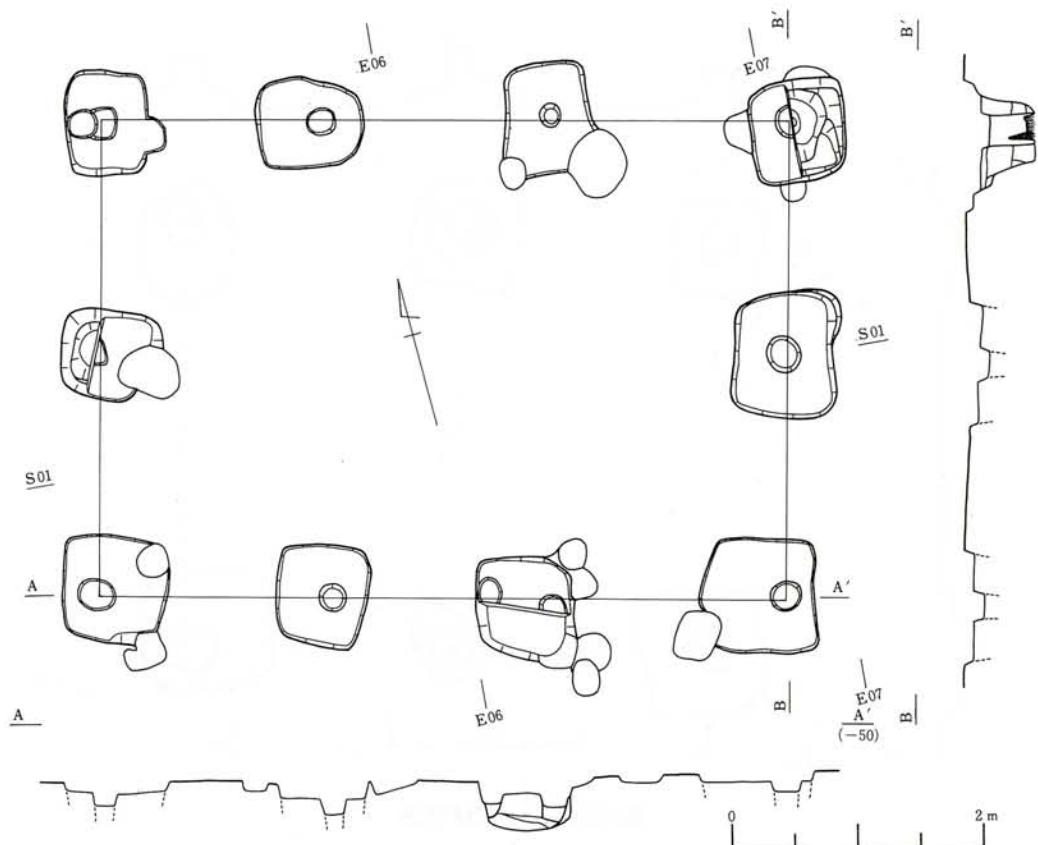
SBO1建物跡

E区中央部でL-3下面より検出された南北2間、東西3間の東西棟の掘立柱建物跡である。すべての柱穴には柱痕跡が検出されており、柱間寸法は、北側柱列で西から1.75+



第9図 3号住居跡

$1.83+1.87\text{m}$ 、南側柱列で西から $1.88+1.75+1.85\text{m}$ 、東妻柱が北から $1.85+1.92\text{m}$ 、西妻柱が北から $1.83+1.92\text{m}$ となり、北側柱総長が 5.47m を計り平均柱間隔が 1.82m となる。おそらく6尺見当で建てられたものと思われる。柱穴は1辺約 $70\sim 90\text{cm}$ の方形を呈しており柱痕跡は径約 $20\sim 31\text{cm}$ を計る。北側柱列の東隅柱の深さは約 55cm で壁は上方が開き氣味にやや傾斜をもっている。柱痕跡から柱痕が発見された。また西妻柱中間の柱穴からも柱痕を検出した。埋土は褐色土と暗褐色土で、黄色土をブロック状に含み、木炭が混じるものと、暗褐色土で砂が多量に混じるものとがある。埋土中より須恵器杯・甕、土師器杯・甕・高杯が出土し、他に砥石が出土している。建物の方向は東妻柱列で測定すると北で約15度東に偏している。



第10図 SB01建物跡

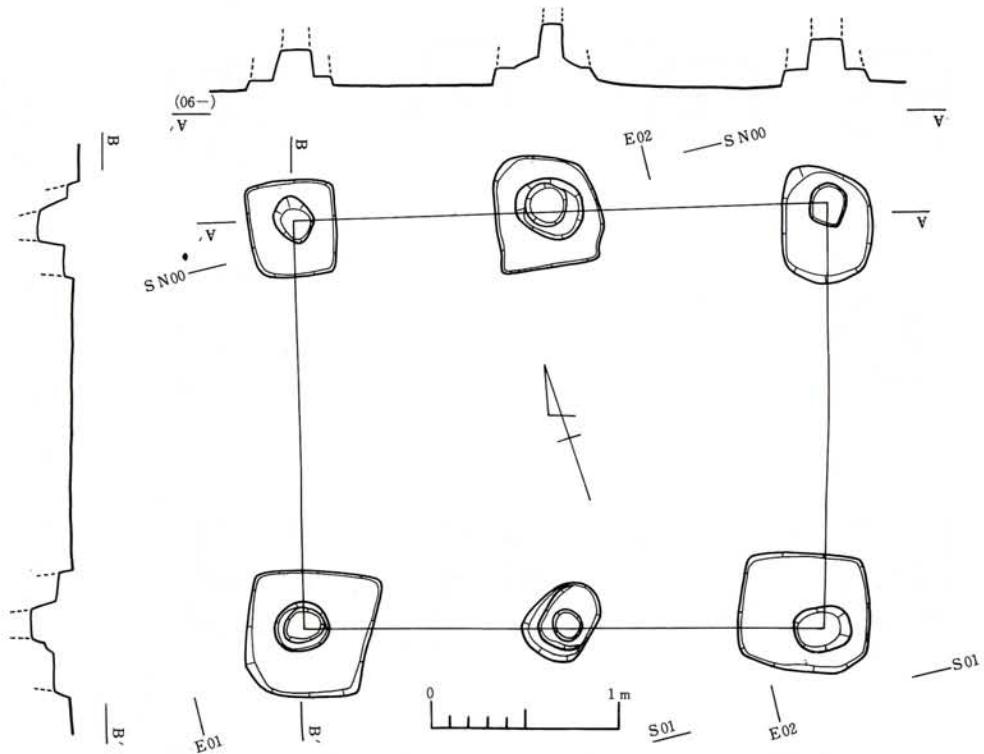
SB02建物跡

E区西北部において検出した建物跡で、梁行1間、桁行2間の小規模な建物である。柱穴には柱痕跡が検出されており、柱間寸法は北側柱列で西から $1.35+1.49m$ 、南側柱列で西から $1.40+1.35m$ となっており、西妻柱で $2.16m$ 、東妻柱で $2.26m$ を計る。桁行の柱間隔はかなりばらつきが認められる。柱穴は一辺 $47\sim64cm$ の方形を呈しているが、南側柱列中間の柱穴は約 $35\times45cm$ の楕円形を呈している。柱痕跡は径 $17\sim30cm$ を計る。建物の方向は北で 17 度東に偏している。

1号溝

調査区の中央よりやや南方において検出されている。南側の堀跡とほぼ平行に東西にはしる溝である。東部は湿地状の落ち込みによって切られているが、西部はさらに西区にも延びていることが確認されている。幅は $40\sim100cm$ 、深さは約 $20cm$ である。断面形は底面の平坦な「U」字形を呈している。溝の東部での壁面は、下方では平坦な底面から直線的に立ち上がるが、上方では緩やかな傾斜をもって広がりぎみに立ち上がっている。

遺物は古墳時代～平安時代の土師器の杯・甕・高杯・高台付杯などが出土している。須



第11図 SB02建物跡

恵器は杯・甕などが出土しており、杯の底部は切り離しの後調整の行なわれているものと無調整のものとが出土している。又、赤焼き土器も出土しているほか、石製模造品（円盤形）が1点出土している。

2号溝

中央部において検出された南北に走る溝である。北側を東西に走る溝に切られ、さらにSB01の柱穴や小柱穴によって一部削平されている。溝幅は約30cm、深さ約5~10cmであり、断面形は「U」字形を呈している。出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯が出土し、さらに臼玉が出土している。

17号溝

調査区の北東部の一段下がった面より検出されている。溝の北端は北壁に入り込んでおり、南側は新しい落ち込みによって切られている。幅30cm、深さ25cmで断面形は「U」字形を呈している。堆積層は木炭を含む黒色土である。

遺物は壁面に沿って出土しているものが多く、土師器杯・高杯・甕などが多量に出土している。他に琥珀玉や黒耀石も僅かだが発見されている。

19号溝

調査区東部の堀が南北にはしる部分の西側に検出した。溝幅は40cm～60cm、深さは10cmである。断面形は「U」字形を呈している。

遺物は土師器甕、高杯などが出土している。

22号溝

10号遺構の東側に検出されており、南側が堀跡によって切られているものである。幅40cm、深さ20cmを計り、断面形は底の平坦な「U」字形を呈している。堆積土には木炭が含まれており、遺物が多量に含まれている。

遺物は、土師器杯、高杯、甕などのほかに滑石の剝片、琥珀の小片も出土している。

西区溝跡について

西区では8条の溝跡を検出した。

1号溝は調査区西側において検出し、第3層下面において確認された南北に走る溝である。底面は平坦であり、壁は底面より垂直に立ち上がり上半部が外に開らくもので、溝幅は上面で約105～170cm、中段で約65～100cm、底面で約40～55cmを計る。深さは確認面より約60～80cmである。堆積土層はレンズ状を呈しており、6層に大別することができる。埋土中より須恵器杯、甕、土師器杯、高台付杯、甕などの小破片が多量に出土している。

2号溝は中央部で検出した2条の溝跡のうち西側のものである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。溝の残存長は約3.9m、幅は約15～30cmで、底面での幅は約10～20cmである。深さは確認面より約2～10cmである。埋土中より須恵器杯、土師器杯などの小破片が出土している。

3号溝は2号溝の東側で検出した南北に走る溝である。北側は7号溝や小柱穴で切られている。溝幅は約15～30cm、深さ5～10cm、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は土師器の小破片が2点だけである。

4号溝は堀跡の北側で検出した東西に走る溝である。北側が井戸跡に切られ、南側は堀に切られている。底面は平坦で壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、上方部は緩やかに開いている。幅は上端部で約105～115cm、中段で約45～70cm、底面で約30～55cmであり、深さは約15～25cmを計る。出土遺物は須恵器杯・甕、土師器杯・甕の破片が出土している。この溝は東区の1号溝と同一のものである。

5号溝は東側で検出したもので、6号溝の埋土を掘り込んでつくられている。この溝の南側は4号溝に切られ、北側では6号井戸跡により一部削平されているが、北東隅でほぼ直角に西へ屈曲して延びている。溝幅は約70cmであり、西側では約30cmと細くなる。深さは約10cmで、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は土師器杯などが出土している。

7号溝は北側中央部において検出した東西に走る溝である。西側は4号井戸跡、東側は後世の土括によって切られている。溝幅は約30～100cmで西側が細くなっている。深さは約20cmを計り、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は須恵器杯・甕、土師器杯・甕が出土している。

8号溝は北壁沿に走る溝跡である。西側は後世の井戸跡に切られ、中央部で1号溝跡に切断されている。溝幅は約30cm、深さは約10cmを計り、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

土 括

今回の調査で3基の土括が発見された。

1号土括は東区中央部の北壁に入り込んで検出されたものである。平面形は不整円形を呈し、床面は平坦で壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がる。径約120cm、深さ約15cmを計る。出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕などの小破片が多量に出土している。

2号土括は北東隅において検出した。平面形は方形を呈し、一辺の長さは北壁まで約80cmであり、深さは約10cmである。床面は平坦で壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は土師器杯・甕の小破片が数点出土しているだけである。

3号土括は3号住居跡南側で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸が約140cm、短軸で約90cmを計る。床面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は土師器杯・高杯・甕が出土している。

井 戸 跡

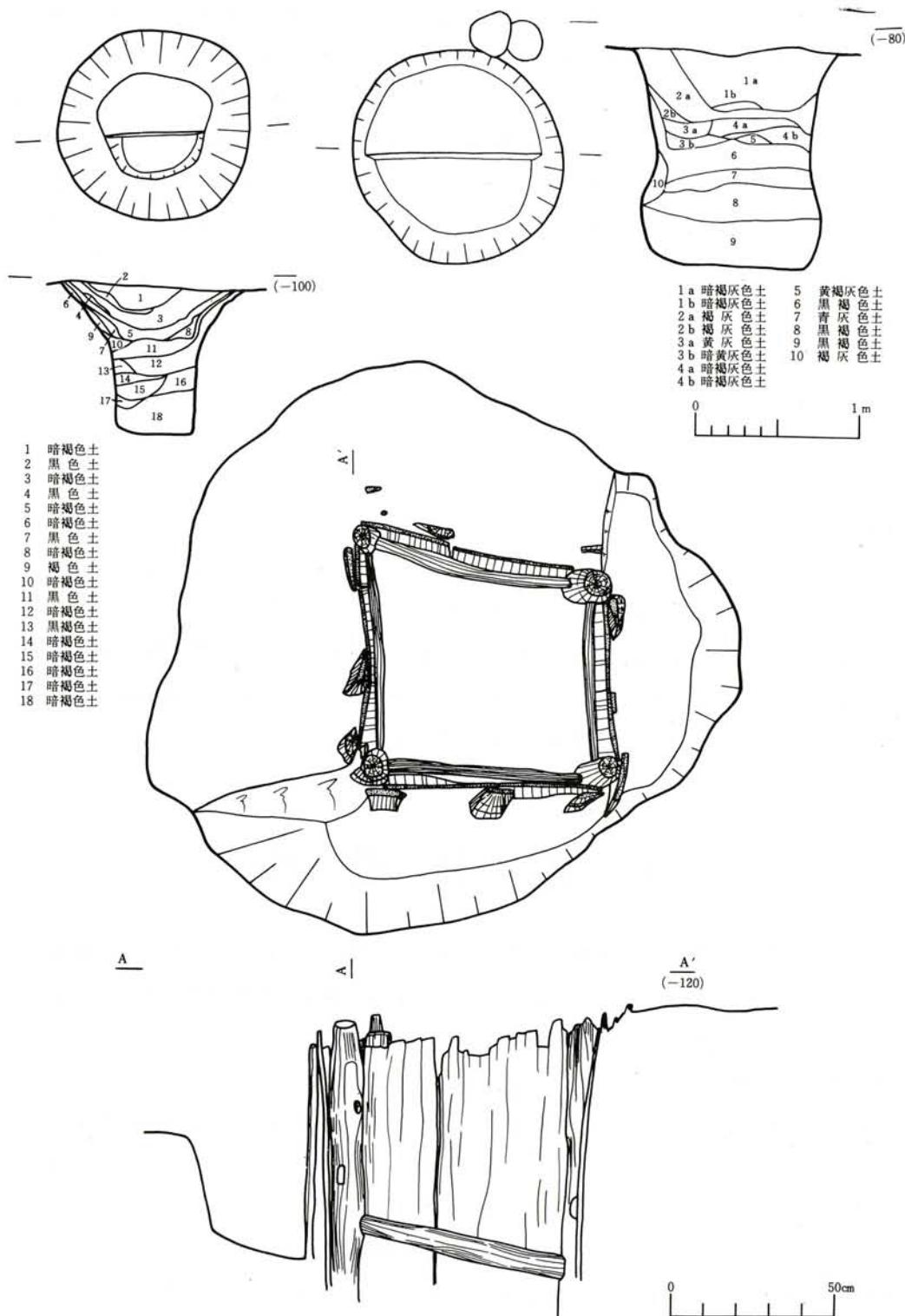
西区で検出された井戸跡は21基で、すべて素掘りである。検出された井戸跡は形態的に2つのタイプに分類することができる。平面形はともに円形を呈するが、断面形は、底面よりほぼ垂直に立ち上がるものと、上方部で逆「ハ」の字形に開くものとがある。

前者のタイプに代表される14号井戸跡は上端部径が125cm、底面で径73cmを呈し、深さは約130cmを計る。覆土は上層でレンズ状堆積、下層で平行堆積を示し、10層に区分された。覆土より土師器杯、須恵器杯の小破片が出土している。

後者のタイプに代表される3号井戸跡は上端部径が114cm、円筒部の上端部で径58cm、底面で径46cmを呈し、深さは90cmを計る。覆土はレンズ状堆積を示し、18層に区分されたが、大きく分けると7層になる。上層部は暗褐色土でシルト質であり、下層部は暗褐色土砂質である。また木炭の層が3層みられる。砂層より土師器杯、須恵器杯の小破片が出土している。

井 戸 跡 (東区)

東側の一段底い所で検出した井枠を組む井戸跡である。一辺が約70～80cmの方形を呈し、厚さ約2cm、幅約25～50cmの板を2枚一組とし、四面に立てて囲っている。四隅に丸杭を



第12図 西区・東区井戸跡

打ち込んで板材を立てており、その外側に角杭を打ち込んで四隅を補強し、さらに側板の継ぎ目には角杭を打ち込み、側板を押えている。井戸内側の下方には側板を止めるために四隅の丸杭にホゾ穴を開け、半截した丸太をホゾ穴に差し込み横に渡している。井戸の深さは約70cmを計り、井戸内の埋土は平行推積を示し、埋土からは土師器杯、須恵器杯の小破片と曲物の側板、鉄釘2点が出土している。井戸枠の外側には東西約1.7m、南北約1.9mを計る不整円形の掘り方を検出した。埋土からは土師器杯、須恵器杯の小破片が出土している。

堀 跡

堀跡は西区と東区の南側で検出した。西区の堀幅は約4.5m、深さ約80cmを計る。東区の堀跡は幅約2.7m、深さ50cmで、西区のものと比べるとやや小さめである。東区西側には木製の樋が据えられており、両側の堀跡は屈曲して、樋に接続している。樋の大きさは長さ1.9m、幅13cm、深さ13cmの箱形を呈しているが、上蓋はみられなかった。この樋を据えるための幅約50cmを計る掘り方がみられた。堀の両岸には木杭を打ち並べ、木の枝や廃材を利用して、岸辺に据えており、土留めしている。また堀の中には太い木の幹が横になって散在している。堀跡の覆土はレンズ状堆積を示し、出土遺物は漆器、下駄、田下駄、木札、柄、ヘラ状木製品、樽の栓や側板などの木製品の他に近世陶磁器、硯が多量に出土している。さらに古代の瓦、土師器、須恵器、中世陶器、緑釉陶器、灰釉陶器など多く出土している。西区と東区の堀跡は樋によってつながっている。

V 出 土 遺 物

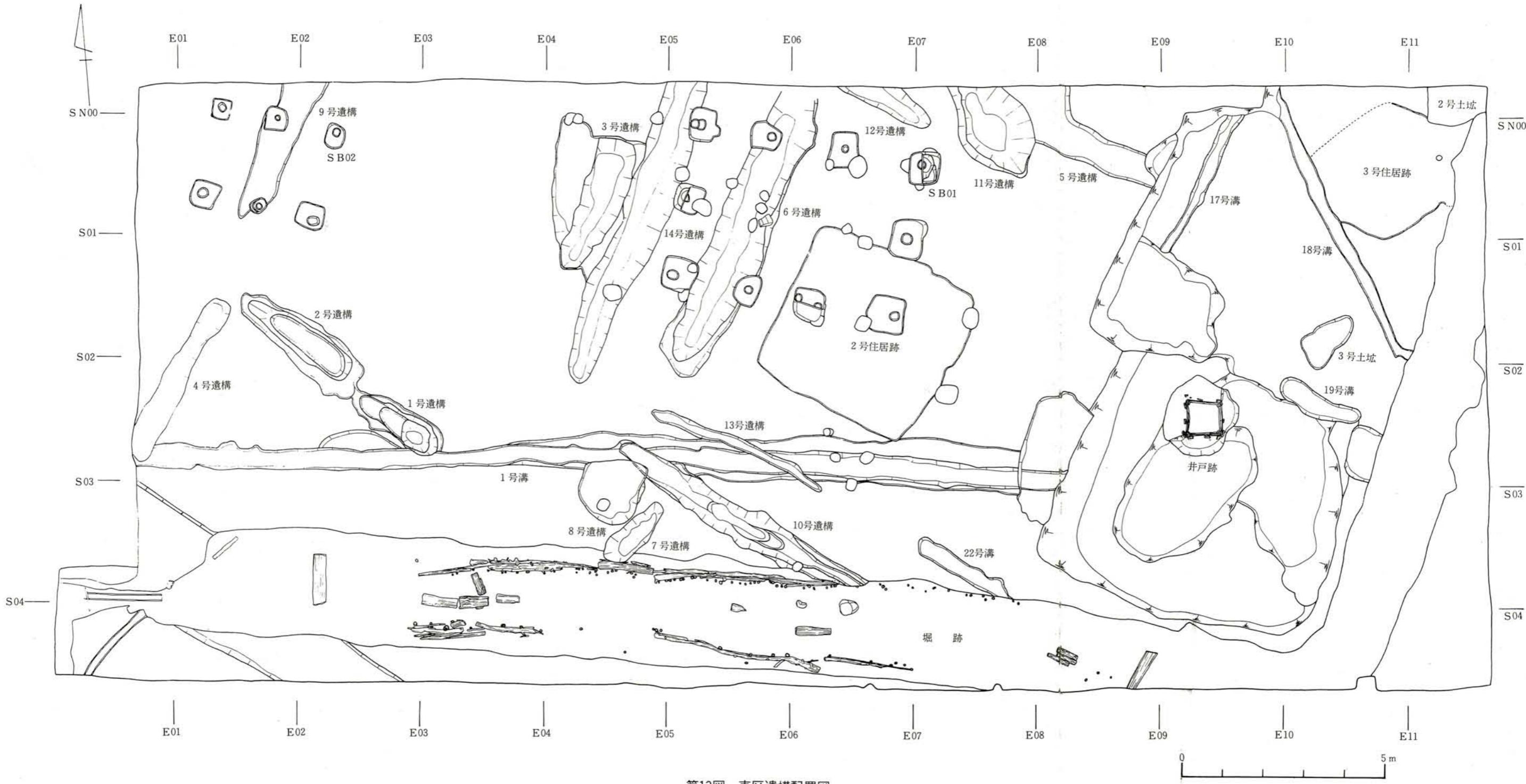
本調査の結果、発見された遺物は土師器、須恵器、陶磁器、瓦、石製模造品、砥石、玉類、鉄製品、木製品、古銭などが多量に出土している。現在遺物整理中であるため、詳しく述べることは出来ないが、以下に簡単に記述しておきたい。

(1) 土 師 器

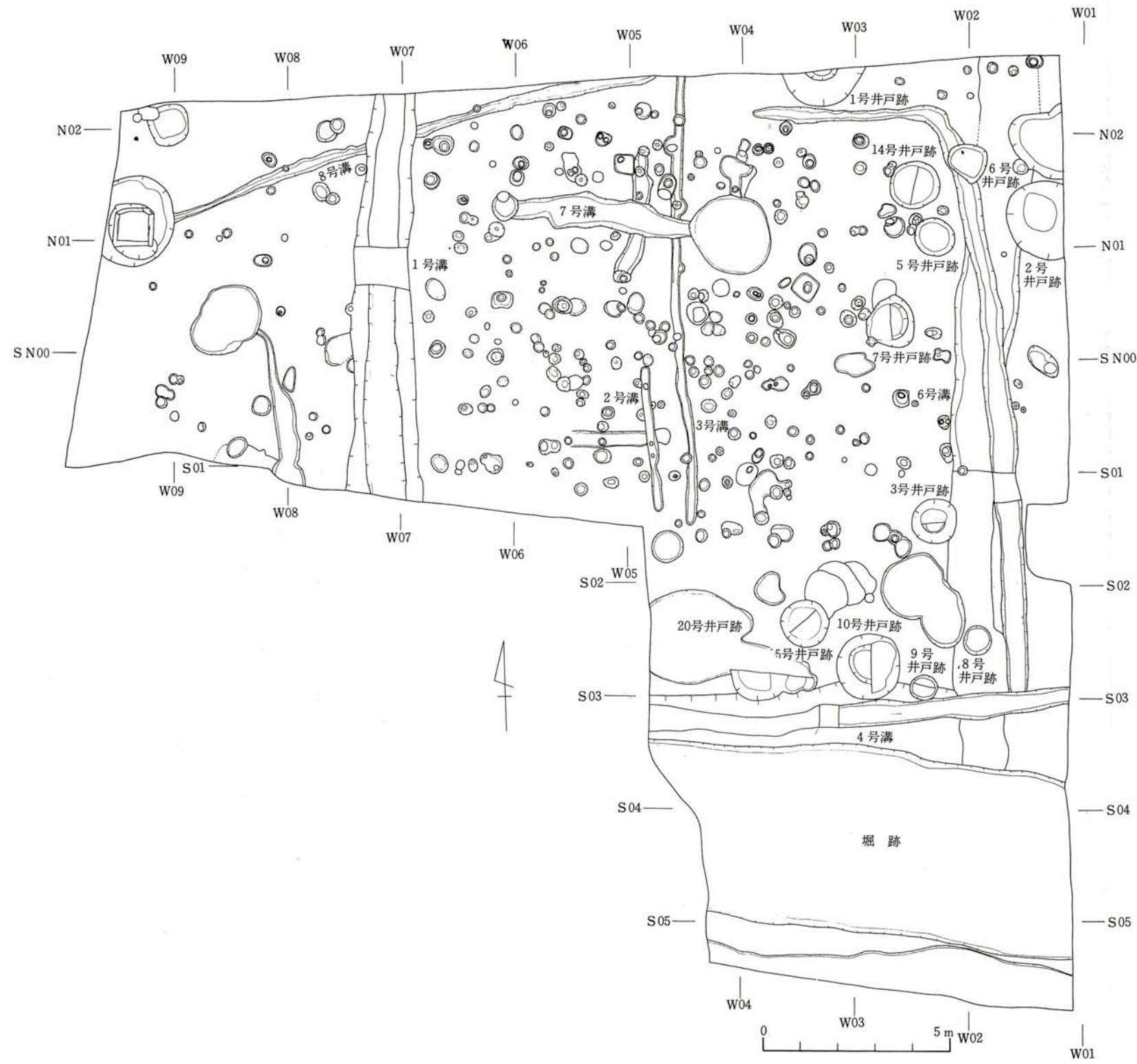
土師器は、杯・高杯・壺・甕などの器種がみられる。遺構内から発見されたものが多く、特に1号遺構～14号遺構とした橢円形、溝状のプランを有するものや、17号・20号・22号溝跡から多量に出土している。

遺構内から一括して出土した3号遺構の遺物の分類を試みることにしたい。

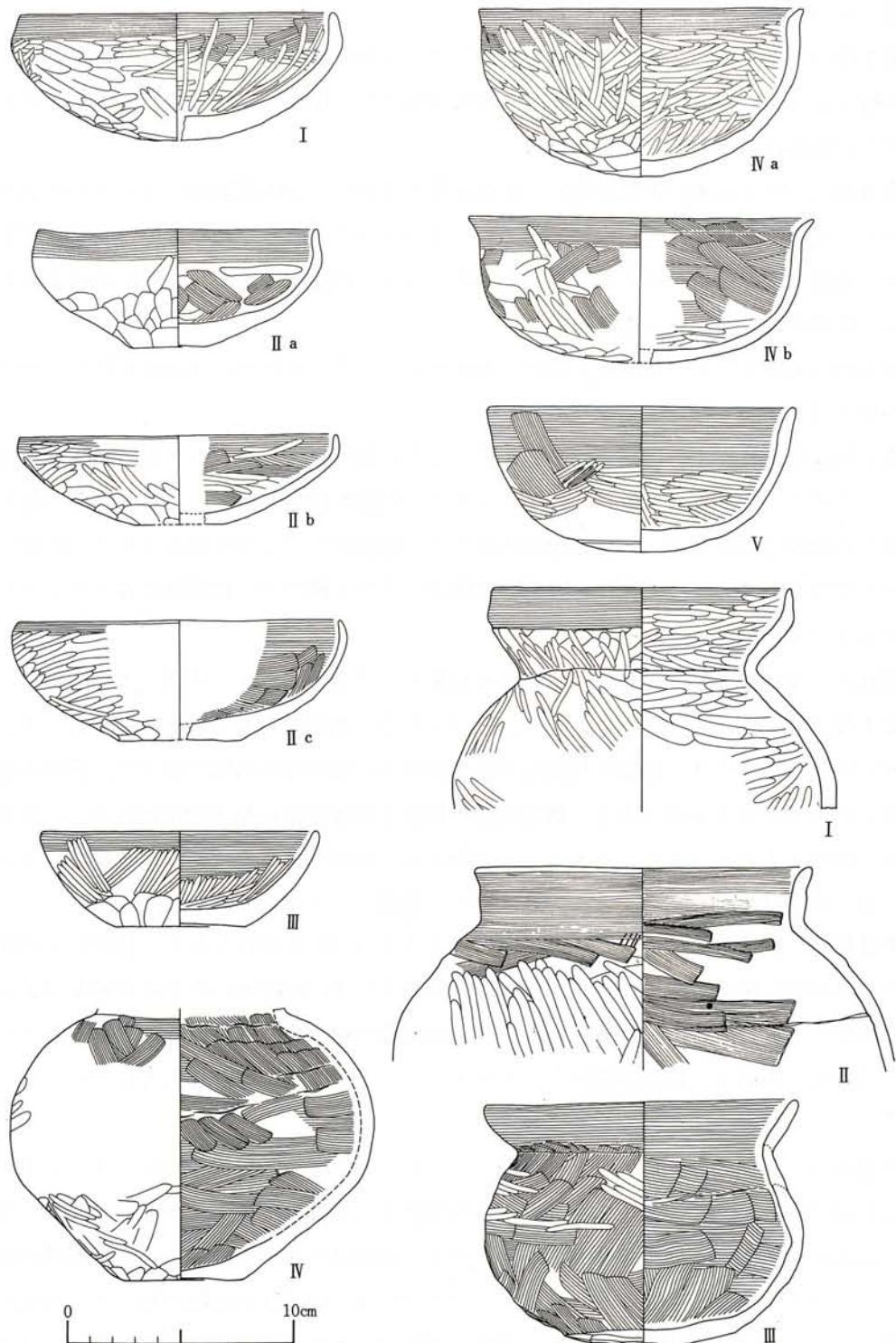
杯は、5類に大別される。第Ⅰ類は丸底を呈し体部は丸味をもって内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや内傾して直立するものである。外面口縁部は横ナデ、体部から底部にかけてヘラミガキが施されている。内面は口縁部が横ナデからヘラナデが施され、底部から



第13図 東区遺構配置図



第14図 西区遺構配置図



第15図 出土遺物

体部にかけて放射状ミガキが行なわれている。

第Ⅱ類は平底を呈し、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部が直立するか内湾するもので3種（a～c）に分けられる。外面口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリ、ヘラミガキが施され、底部はヘラケズリされている。

第Ⅲ類はやや上底風の平底を呈し、体部は開きながらやや内湾気味に立ち上がり口縁部にいたるものである。外面口縁部は横ナデ、体部はヘラミガキが施されているが、体部下半から底部にかけてはヘラケズリが行なわれている。内面口縁部から体部にかけて横ナデされ、底部はヘラミガキが施されている。

第Ⅳ類は丸底を呈し、体部は半球形に丸味をもって立ち上がり、口縁部は外方に開いて器の最大径をもつもので2種が認められる。

第Ⅴ類は底部に粘土の補足が行なわれているため有段を呈しており、体部は球形に丸味をもって立ち上がり口縁部はやや外反するもので内面は黒色を呈する。器面は相当荒れているため明瞭ではないが、外面口縁部は横ナデ、体部はヘラミガキされており、底部にはナデが行なわれている。内面は口縁部から体部にかけて横ナデ、底部付近はヘラミガキが施されている。

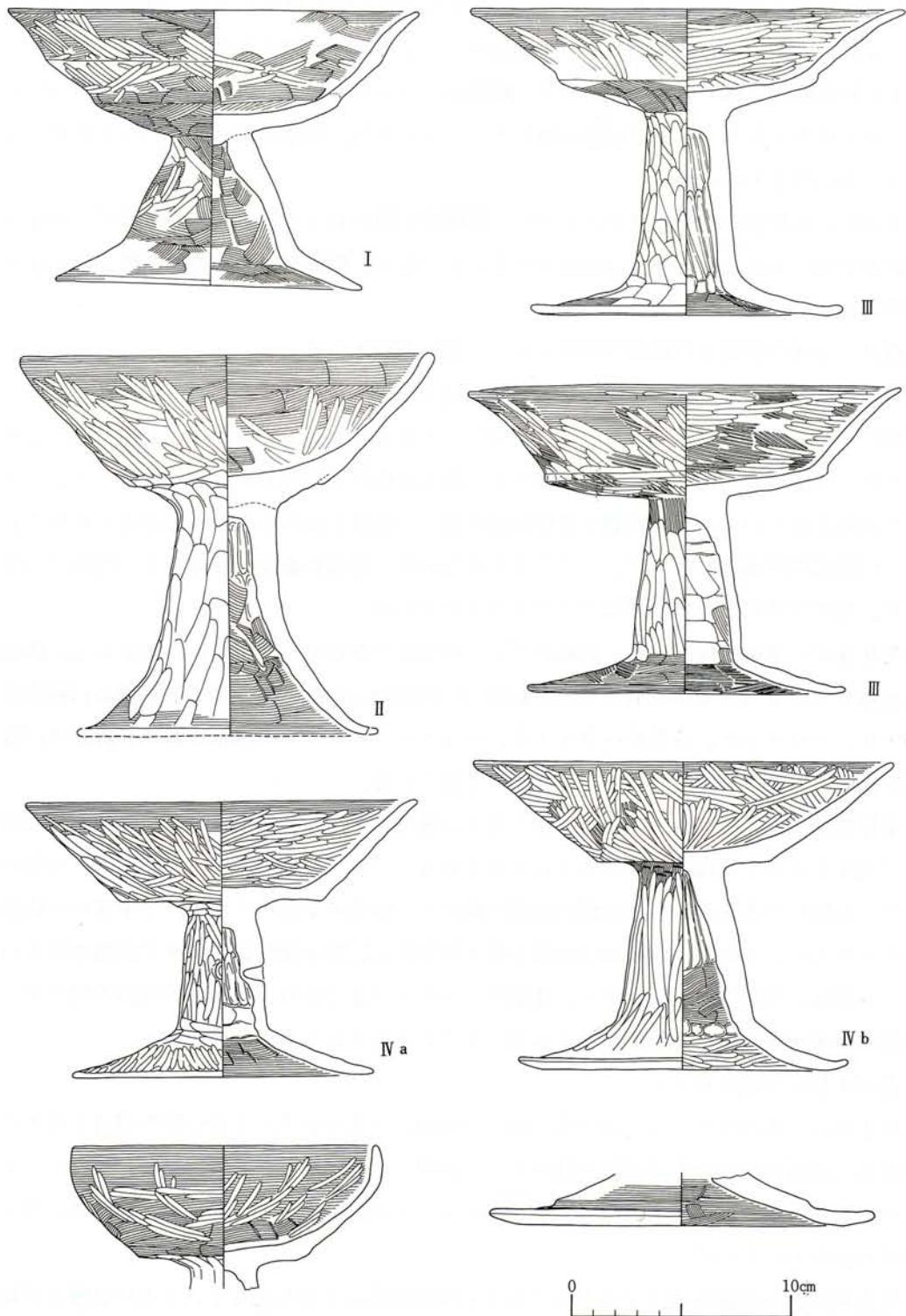
高杯は、全体の形態から知られるものを対象として分類すると、4類に大別される。

第Ⅰ類は、杯部に粘土紐の接合で生じたとみられる二重の段をもち、口縁部が逆「八」の字状に外反するもので、脚部は杯部との接合部分から約25度の角度で広がり、裾部は鋭く「く」の字状に開くものである。脚部内面の杯部との接合部に粘土の突起をもつ。外面は杯部、脚部ともにヘラナデ、ヘラミガキが施され、口縁部と脚裾部には横ナデが行なわれている。内面は杯部にヘラナデ、ヘラミガキ、脚部にヘラナデがみられる。

第Ⅱ類は、杯部外面の体部と底部の境に粘土はりつけによる段をもち、体部から口縁にかけて直線的に開くもので、脚部は裾部と屈曲をもたずに緩やかに広がる形態を呈する。脚部の長い大形のもので、外面は杯部口縁と脚裾部に横ナデ、それ以外はヘラミガキが施されている。内面は、杯部が横ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ、脚部は上方にナデツケ、下方にヘラナデ、横ナデが行なわれている。

第Ⅲ類は、杯部外面の体部と底部の境がくびれて段をもち、体部は外反しながら立ち上がり口縁部が外に開くものである。脚部は円筒状を呈し裾部は平たく屈曲して開く。外面は口縁部から体部にかけて横ナデ、ヘラミガキ、底部はヘラナデが施され、脚部は円筒部をヘラミガキ、裾部をヘラケズリ、横ナデされている。内面は口縁部が横ナデ、体部から底部にかけてヘラミガキが行なわれ、脚部は円筒部にナデツケ、裾部に横ナデ、ヘラナデが施されている。

第Ⅳ類は、杯部外面の体部と底部の境に鋭い稜をもち、体部から口縁にかけてほぼ直接



第16図 出土遺物

的に開きながら立ち上がるものである。脚部は円筒状を呈し裾部が「く」の字状に開くもの（a類）と、下方がやや開きながら裾部が「く」の字状に開くもの（b類）とがある。ともに外面杯部は横ナデ、ヘラミガキ、脚部がヘラミガキされているが、b類にはハケメ、ヘラナデもみられる。内面は杯部が横ナデ、ヘラミガキ、脚部はナデツケ、ヘラナデ、ヘラミガキが行なわれている。

この他にも杯部の形態が異なるものや、脚裾部に段を有するものなどがあるが、全体の器形が不明であるため、今回は分類から外しているが、整理が進めばさらに細分される可能性がある。

甕は、全体の形態と口縁部の特徴から、3類に大別される。

第Ⅰ類は、口縁部が複合口縁となるもので粘土貼付けから外面と内面に稜をもつもの（a類）と、折り返しされているもの（b類）とがある。a類の甕は体部以下が欠損しているため、全体形は不明である。内外面ともに刷毛目整形が行なわれ、その後横ナデ、ヘラナデが施されている。b類の甕は球形胴部を呈し、径約8cmの小さな底部が付くものである。口縁部内外面とも横ナデ、ヘラナデが行なわれ、体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ、指ナデされ、底部外面はヘラケズリされている。

第Ⅱ類は、単純口縁を呈し、断面が「く」の字状に折れてやや肥厚い口縁をもち、体部の曲線と異にするやや平底風のもの（a類）と小形のもの（b類）がある。外面は口縁部を横ナデ、ヘラミガキ、体部をヘラケズリ、ヘラナデ、ヘラミガキされており、内面は口縁部を横ナデ、体部以下をヘラナデ、指ナデされている。

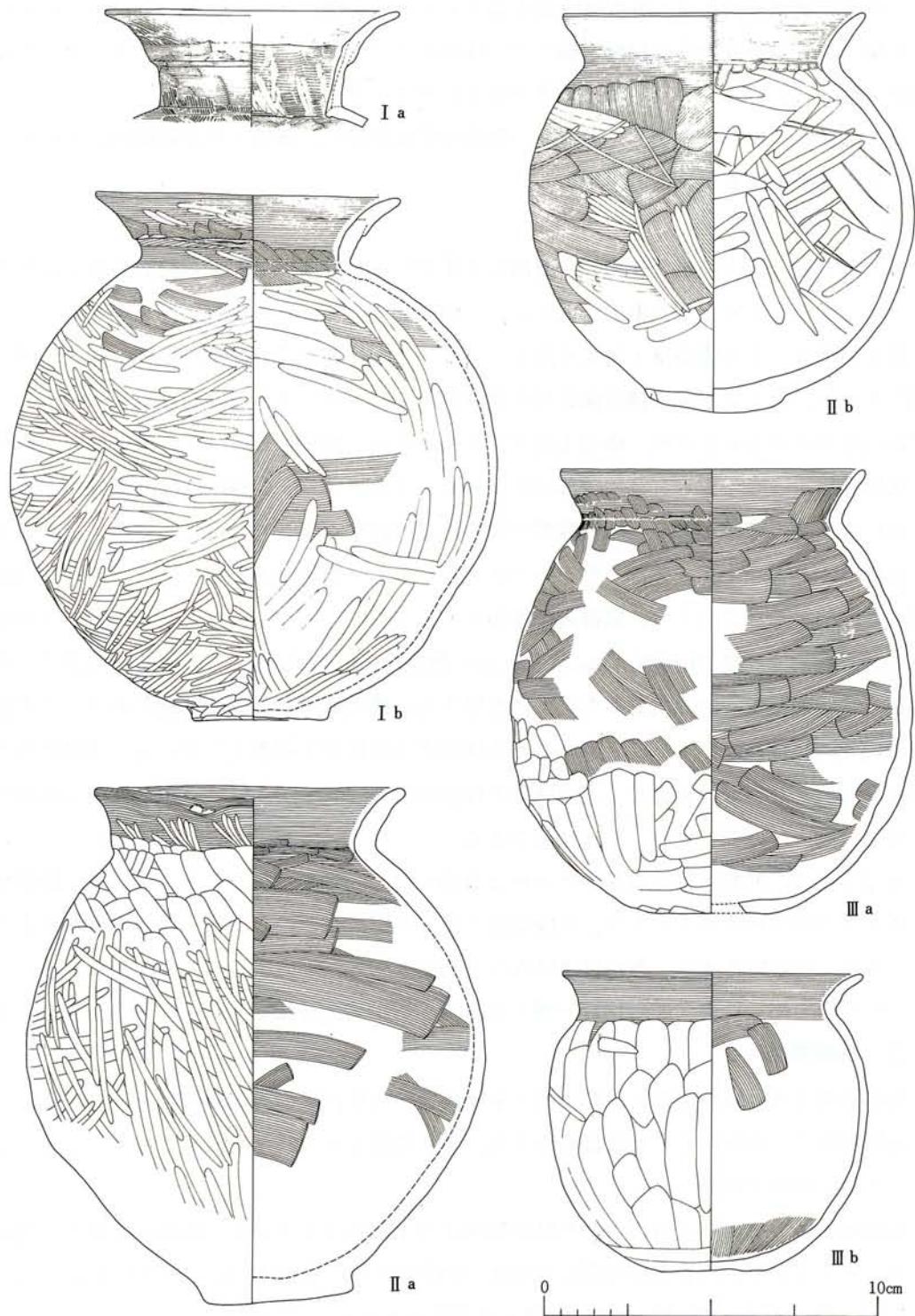
第Ⅲ類は、第Ⅱ類同様「く」の字状に開く口縁部をもつが、器厚は薄く、体部から底部まで丸味をもって底部が付けられないものである。これも大形のもの（a類）と、小形のもの（b類）がある。a類は外面口縁部を横ナデ、体部上半をヘラナデ、下半部から底部をヘラケズリしており、内面は口縁部が横ナデされる以外は全体にヘラナデが施されている。b類は、外面口縁部を横ナデ、体部をヘラケズリしており、内面は口縁部を横ナデ、体部は磨滅が著しいため分明ではないがヘラナデされているものと思われる。

壺は4類に大別される。

第Ⅰ類は、体部から「く」の字状に開く口縁部の上方が直立して緩い稜を形成するものである。外面口縁部の直立部分を横ナデしており、口縁下半部から体部にかけてはヘラミガキが施されている。内面は口縁上部が横ナデ、下半部がヘラミガキされ、体部はヘラミガキが行なわれている。

第Ⅱ類は、口縁部が直立するものであるが体部中央以下が欠損しているため形態は不明である。

第Ⅲ類は、口縁部が「く」の字状を呈しやや内湾しながら立ち上がるもので、胴部がふ



第17図 出土遺物

くらむ橢円形状を呈する。底部は丸底を呈するもの（a類）と、平底風になり小形のもの（b類）がある。外面は口縁部を横ナデ、体部をヘラナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキされ、内面は横ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキが行なわれている。

第IV類は、口縁部が欠損しているが、底部は平底を呈し、体部下半が直線的に立ち上がって上半部が丸味を呈するものである。

(2) 須 惠 器

主として西区からの出土が多く、遺構より出土したものは破片が多く器形の判るものは、東区5号遺構より出土した把手付椀1点と、西区ピット77より出土した杯2点である。

把手付椀は、5号遺構第1層より出土したもので、体部から口縁部にかけ2分の1程欠損している。把手は下部の接合部分だけが残存しているだけである。底部がややくぼみ、体部は緩やかに立ち上がり、体部上部で最大径を計る。体部と口縁部との境には断面形が三角形を呈する段がみられ、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部はやや外傾する。体部には2重の隆帯があり、この隆帯の間に櫛描波状文が施されている。外面は口縁部より体部までロクロナデ、体部下部をヘラナデしたのちに指ナデを施している。内面は口縁部より体部までロクロナデ、底部周縁を指ナデしており、中心部分にヘラ状工具による圧痕が認められる。推定口径8.4cm、底径5.2cm、器高7.2cm、最大径9.3cmを計る。色調は、内外とも暗灰青色で断面は内面がセピア色を呈する。焼成は非常に良く堅緻である。この把手付椀と同時期のもので、穂と考えられる体部の小破片が1点出土している。小破片のため器形は判らないが、外面に一条の隆帯と櫛描波状文がみられる。内外面ともに灰褐色を呈し、焼成は堅緻であり、胎土は密である。

杯は平底で、回転糸切り技法でロクロより切り離し、調整を行なわないもので、器形は底部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部で脹らみを持つものである。他の遺構外出土のものも同一器形であるが、底部に手持ちヘラ削りを施されているものが若干みられる。

これらの器種以外に、高台付杯・甕・台付壺・短頸壺・長頸壺・双耳杯が出土している。

(3) 陶磁器類

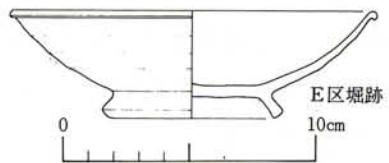
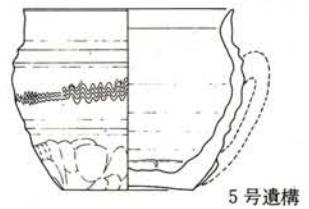
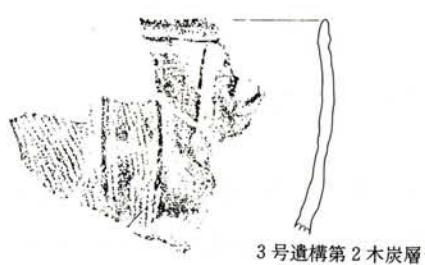
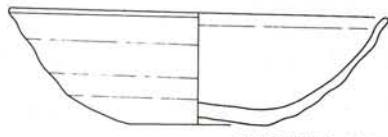
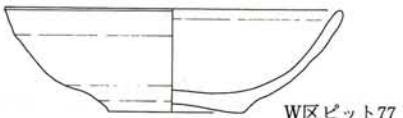
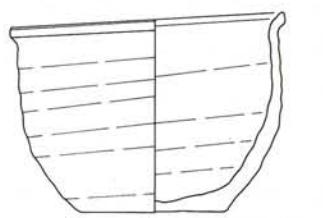
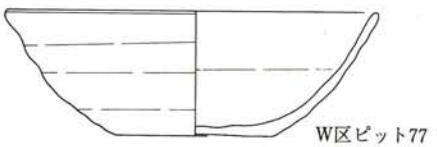
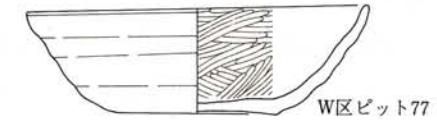
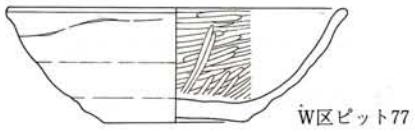
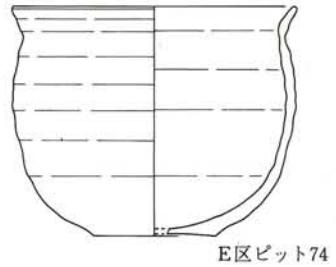
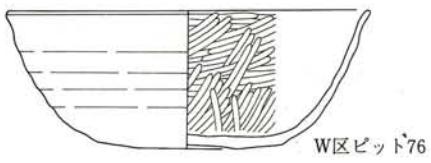
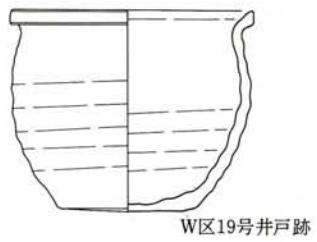
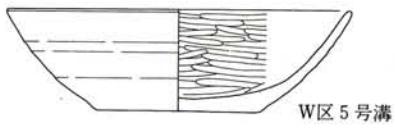
陶磁器類では、緑釉陶器・灰釉陶器・中世陶器・近世以降の陶磁器が出土している。

縁釉陶器は、高台の付く杯の底部が2点、壺の体部とみられるものが1点出土しているが、すべて破片である。

灰釉陶器は、底部に高台の付いた杯が堀跡より1点出土している。体部は底部より内湾ぎみに立ち上がり、口唇部は外側に反り返って稜をつくる。口径14.6cm、底径6.4cm、器高4.3cmを計る。ほかに遺構外から杯・甕・壺の破片が出土している。

中世陶器は東区堀跡より甕の破片が1点出土している。

近世以降の陶磁器は堀跡から多量に出土している。



第18図 出土遺物

(4) 瓦類

瓦は調査区全域より出土している。平瓦・丸瓦・軒平瓦が出土しているが、主として平瓦が多くみられる。

① 軒丸瓦

軒丸瓦は、東区堀跡、遺構外（第2層）から1点づつ出土しており、破片ではあるが、重弁蓮華文と認められるものである。この2点の軒丸瓦は多賀城第Ⅰ期に相当するものである。

② 軒平瓦

軒平瓦は東区堀跡から破片が1点のみ出土している。ヘラ書きの二重波形文軒平瓦であり、顎面には横方向に縄叩き目が施されている。胎土は大粒の砂粒を多量に含んでいる。この軒平瓦は多賀城跡で650と分類されており、多賀城第Ⅱ期に相当するものである。

③ 平瓦

平瓦は、東区堀跡・湿地状落ち込み、西区堀跡・井戸跡・溝跡より出土しているが、すべて破片である。出土した平瓦を叩きの原体と調整技法から観察すると、凸面は縄叩き目が主で、他に縄叩き目をスリケシているもの、スリケシで叩き目の不明なもの、矢羽根状の叩き目を有するもの、格子状の叩き目を有するものとがある。凹面は布目痕があるもの、布目痕がみられ、さらに糸切り痕が残っているもの、布目をスリケシしているもの、スリケシで布目のみられないものがある。

(5) 石製模造品

東・西区から出土しており、特に東区の遺構内から多く発見されている。円盤形と剣形と刀子形の3種類の他、臼玉、未製品も出土している。また、滑石の原石や剝片もみつかっている。

円盤形が57点、剣形が8点、刀子形が1点の計66点のうち1号遺構～14号遺構より30点が発見されており、その他2号住居、1号・6号・23号溝、3号土塙、ピット89などから出土している。

また、未製品が9点、剝片が124点、原石32点が出土している。

石製模造品については、出土表を作成したので記述を省略する。

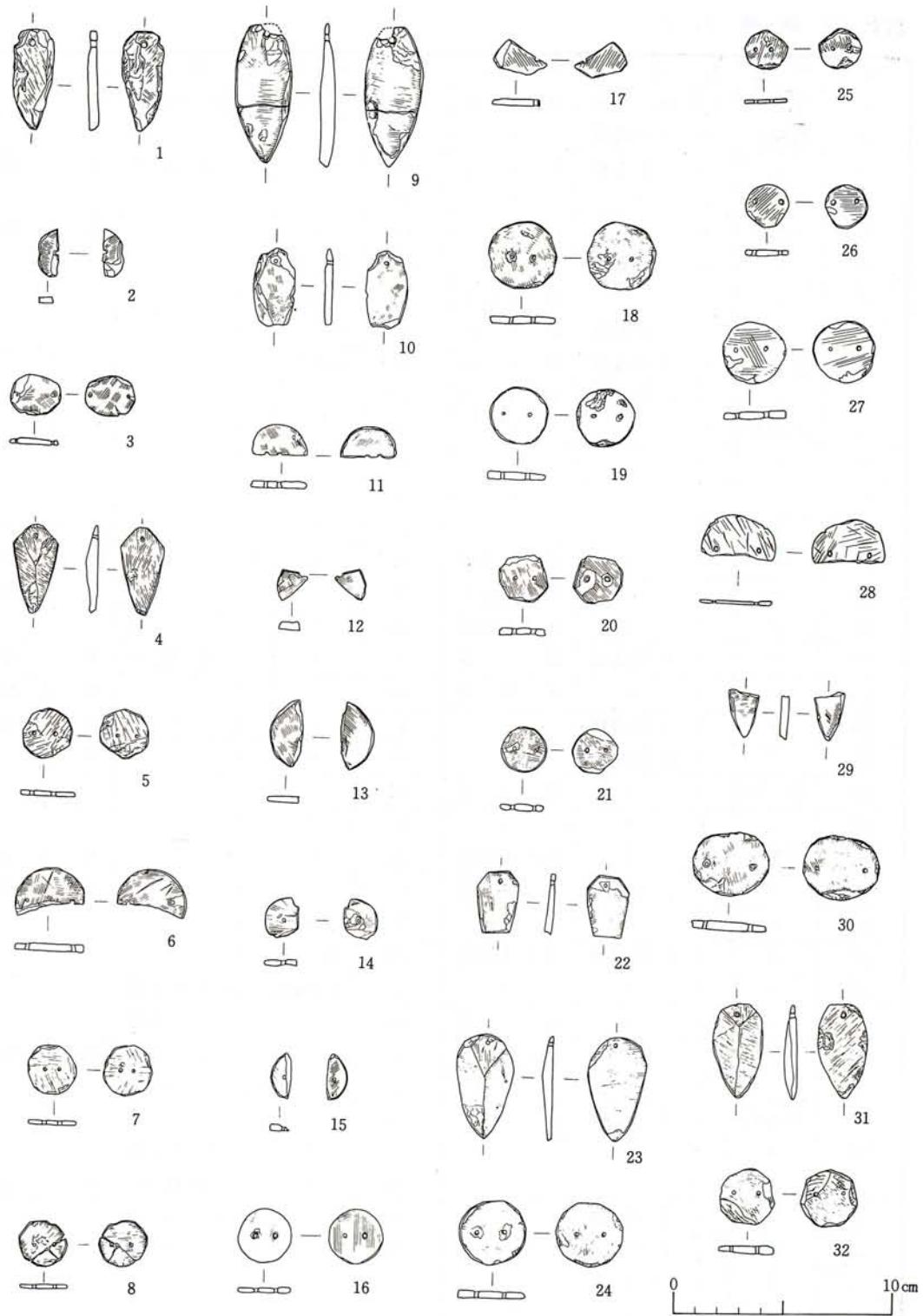
(6) 砥石

遺構内では、東区6号・4号遺構、4号・5号溝、2号住居、西区2号・4号溝、8号土塙、ピットから出土している。特に西区2号溝の砥石は、長径20cm、短径9cm、高さ6cmと大型のものである。

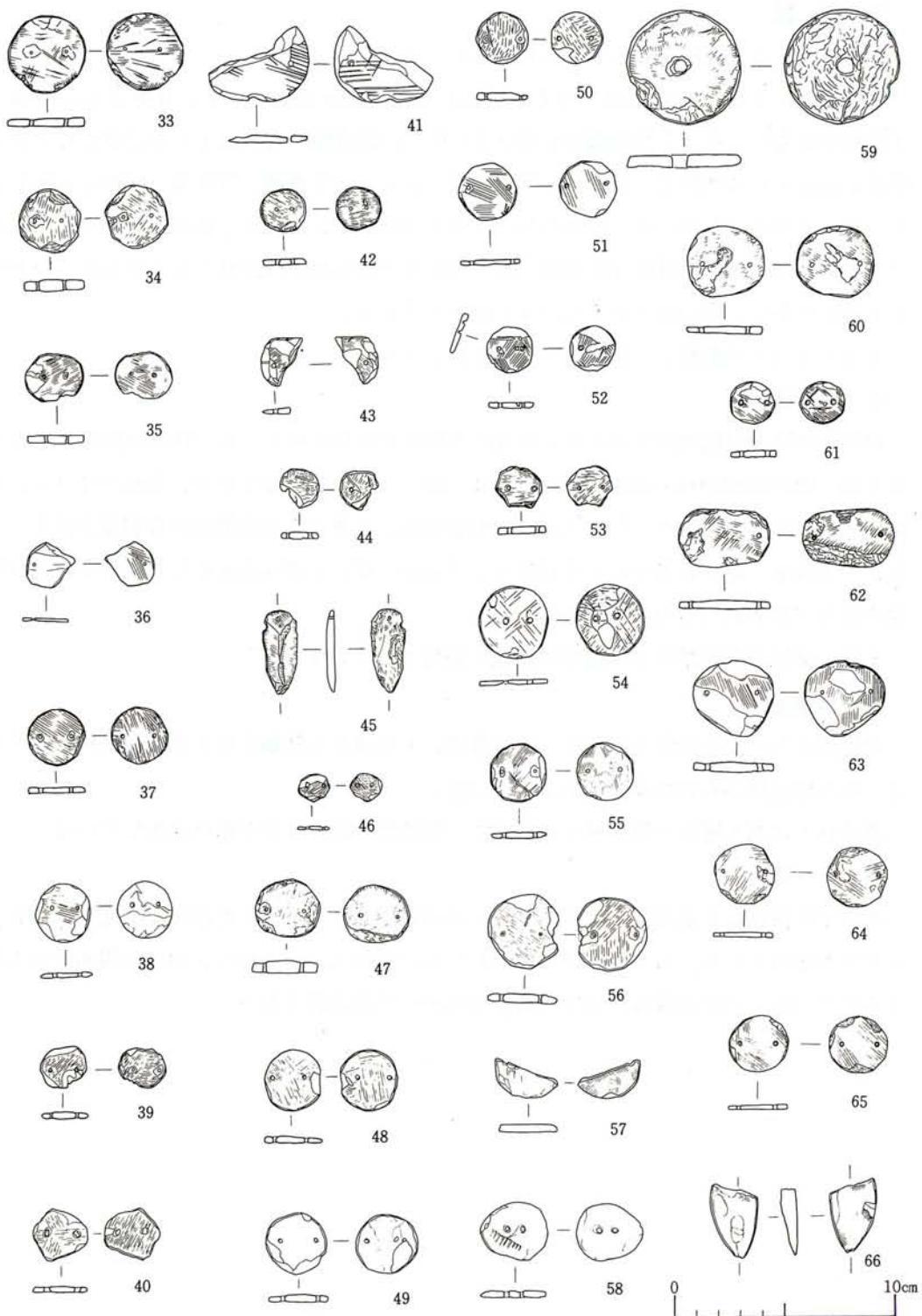
その他遺構外からは20数点の砥石が出土している。

表2 石製模造品

No.	形 態	遺 構 名	出 土 層 位	No.	形 態	遺 構 名	出 土 層 位
1	刀子形	E区堀跡	第 1 層	40	円盤形	E区堅穴状遺構	
2	円盤形	" 1号遺構	"	41	"	" ピット89	
3	"	" 2号遺構	第 2 層	42	"	" 遺構外	第 3 層
4	剣 形	" "	"	43	"	" "	"
5	円盤形	" "	"	44	"	" "	第 4 层
6	"	" 3号遺構	"	45	剣 形	" "	"
7	"	" "	第 2 木炭層	46	円盤形	" "	"
8	"	" 4号遺構	第 4 层	47	剣 形	" "	"
9	剣 形	" 5号遺構	第 1 层	48	円盤形	" "	"
10	"	" 6号遺構	第 1 层	49	"	" "	"
11	円盤形	" "	"	50	"	" "	"
12	"	" "	"	51	"	" "	"
13	"	" "	"	52	"	" "	"
14	"	" "	"	53	"	" "	水田部
15	"	" "	第 1 木炭層	54	"	W区 4号構	砂 層
16	"	" "	灰白色土	55	"	" "	確 認 面
17	"	" "	第 2 木炭層	56	"	" 土 坑	"
18	"	" 8号遺構	第 1 层	57	"	" 遺構外	第 2 层
19	"	" "	木炭層	58	"	" "	確 認 面
20	"	" 9号遺構		59	"	" "	第 3 层
21	"	" 10号遺構		60	"	" "	黑 色 土
22	剣 形	" "	第 1 层	61	"	" "	
23	"	" "	"	62	"	" "	
24	円盤形	" "	第 1 木炭層	63	"	" "	第 4 层
25	"	" 11号遺構	第 2 层	64	"	" "	表 採
26	"	" "	"	65	"	" "	"
27	"	" 14号遺構	第 1 木炭層	66	剣 形	" "	"
28	"	" "	"	67	未製品	E区 4号遺構	
29	"	" "	灰 層	68	"	" 5号遺構	
30	"	" "	第 2 木炭層	69		" 11号遺構	第 1 层
31	剣 形	" "	"	70	"	" 2号住居	
32	円盤形	" 2号住居		71	"	" "	
33	"	" "		72	"	" 堅穴状遺構	
34	"	" "		73	"	" 遺構外	第 4 层
35	"	" 1号溝		74	"	W区 7号溝	
36	"	" 6号溝		75	"	" 8号 "	
37	"	" 23号溝					
38	"	" "					
39	"	" 3号土坑					



第19図 石製模造品



第20図 石製模造品

(7) 玉類

玉類としては、琥珀玉とガラス小玉が出土している。

琥珀玉は、5号・13号遺構からそれぞれ1点づつ発見されている。双方ともに形はほぼ球形であるが、孔は5号遺構のものは2ヶ所、13号遺構のものは1ヶ所に穿たれている。穿孔が認められる琥珀玉は東区の3号・6号・8号・10号遺構、17号溝、堀跡から出土している。その中でも特に3号遺構のものは切子玉形を呈しており、孔は両方から開けられている。その他琥珀の破片は各遺構・溝・住居などから数十点発見されているが、いずれも小破片であり、加工痕のあるものは3点のみである。

ガラス玉は1号遺構から1点のみ発見されている。

(8) 木製品

東区の堀跡や湿地状落ち込みから多量の木製品が発見されている。特に堀跡から下駄・田下駄・樽の側板や栓・漆塗りの椀・木札・柄・ヘラ状木製品などで、木札には「しろ酒可支」と読まれるものや、「...郡南宮村賀川屋」と書かれた墨書銘の板製品が出土した他、「天保十一年」と書かれた木札片や、「嘉永三年」と切り込まれた竹管片など江戸時代の年号が書かれたものが発見された。

また、東区の井戸跡からは曲物の側板も発見されている。

(9) 鉄製品

遺構内からの出土は僅かである。11号遺構、4号溝から鉄鏃片が1点づつ発見されている。その他堀跡から釘片が数点出土している。

遺構外では基本層位の第3層から鉄刀片・鉄鏃片・釘片などが数点出土している。

(10) 古銭

西区より古銭が2点発見されている。1点は確認面から出土した破片で「元」と「寶」の文字が認められる。もう1点は表採されたもので径2.4cmを計り、中央に四角の窓が開けられている。この古銭は、「治平元寶」(1064年)で北宋銭である。

VI まとめ

今回発掘調査を実施した地区は、山王遺跡として包蔵されている広範囲な地域のほんの一画にあたり、調査遺跡名を山王西町浦遺跡（SN-NU）と称することにした。山王遺跡は、多賀城跡の西方に細長く発達した自然堤防上に立地している。居住条件の好適地として陸奥国府として栄えた奈良時代以前から集落が営まれていることが考えられていたが、これまででは、遺物分布調査や小規模な発掘調査が行なわれていただけで推測の域を脱してはいなかった。

しかし、今回の西町浦地区の調査の結果はそれをはっきりと裏づけるものであり、これから多賀城跡周辺の遺跡の取り組み方に対する思考を啓発することになると思われる。

今回の調査で発見された遺構・遺物に対して、ここに充分な考察を行う必要があるが、それを行う時間的余裕がないので、本稿を行うに当り、事実関係の記述と出来るだけ多くの資料を掲載することに努めた。遺構・遺物の細部検討は後日報告することにして、以下に調査結果を簡単にまとめることにしたい。

1. 今回の調査で発見された遺構の年代は、古墳時代から江戸時代未期までで、3時代にわけられる。

古墳時代(中期)：1号遺構～14号遺構、2号住居跡、3号住居跡、3号土壙、溝(17～19、22号)

平安時代：1号住居跡、1・2号建物跡、小ピット群、1号溝、井戸跡

江戸時代：堀跡、井戸跡

2. 古墳時代の遺構のうち、1号～14号遺構は、形状、覆土、出土遺物などから土壙基と考えられる。

3. 今回の調査で多量の石製模造品が出土した。形態は円盤形(57点)と剣形(8点)・刀子形(1点)の3種類である。また石製模造品の未製品が9点、原石も32点出土している。臼玉が67点発見されたほか、石製模造品は、1号～14号遺構から多く発見されており、琥珀玉、ガラス小玉の伴出とともに、前記の性格を物語るものと考えられる。また、未製品、滑石の原石の出土は、同遺跡で模造品が製造されていることを想起させる。

4. 平安時代に属する遺構の中で、掘立柱建物跡、井戸跡の発見は、陸奥国府として栄え、東国の中心的役割を果した時代にも継続して集落が発達していたことが明らかとなり、昨年調査した中山王地区から出土した石帶からも山王遺跡に内包されている奈良～平安期の遺構は多賀城との結びつきが考えられる。

5. 江戸時代の遺構としては、調査区南側に検出した堀跡と西区の素掘り井戸跡があり、堀り跡から多量の木製品、漆器、陶磁器等が出土している。木製品の中に「天保十一年」「嘉永三年」と書かれた木札などが発見されたことから、この堀の年代は、江戸時代末期の1840年～1850年前後と考えられる。

6. 堀跡は、東区の南東隅で北に直角に屈曲しているが、南側の両岸に木杭を打ち並べて木の枝や板材を置き、さらに、西区の堀にストレートには続かずに両者の間に長さ1.9m、幅13cm、深さ13cmの箱形の木製樋が捉えられていることなどから、この堀は特異な性格をもっていたものと考えられる。

調査区の地主である賀川邦雄氏の数代前に一時酒造を行っていたと伝えられているが、堀跡から樽の側板や栓、「しろ酒可支」と読める墨書銘のある木札、「…郡南宮村 賀川屋」と書かれた木板などは、これを裏づける資料となり、この堀跡及び西区で検出した井戸跡は、酒造りに関係のある遺構と考えられる。



図版1 航空写真



図版2 調査区全景（南より）



図版3 調査区全景（西より）



図版4 西区遺構検出状況



図版5 東区遺構検出状況



図版6 1号遺構



図版7 2号遺構



図版8 2号遺構遺物出土状況



図版9 1・2号遺構全景



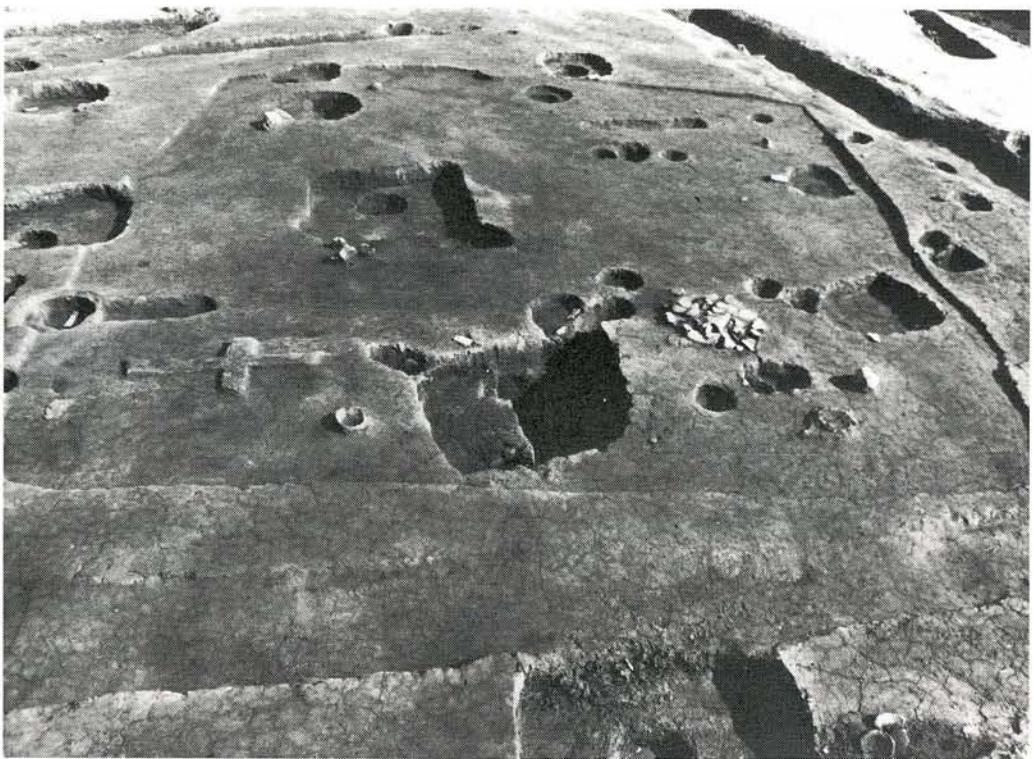
図版10 3号遺構遺物出土状況



図版11 5号遺構遺物出土状況



図版12 1号住居跡



図版13 2号住居跡



図版14 2号住居跡遺物出土状況



図版15 3号住居跡遺物出土状況



図版16 3号住居跡出土滑石



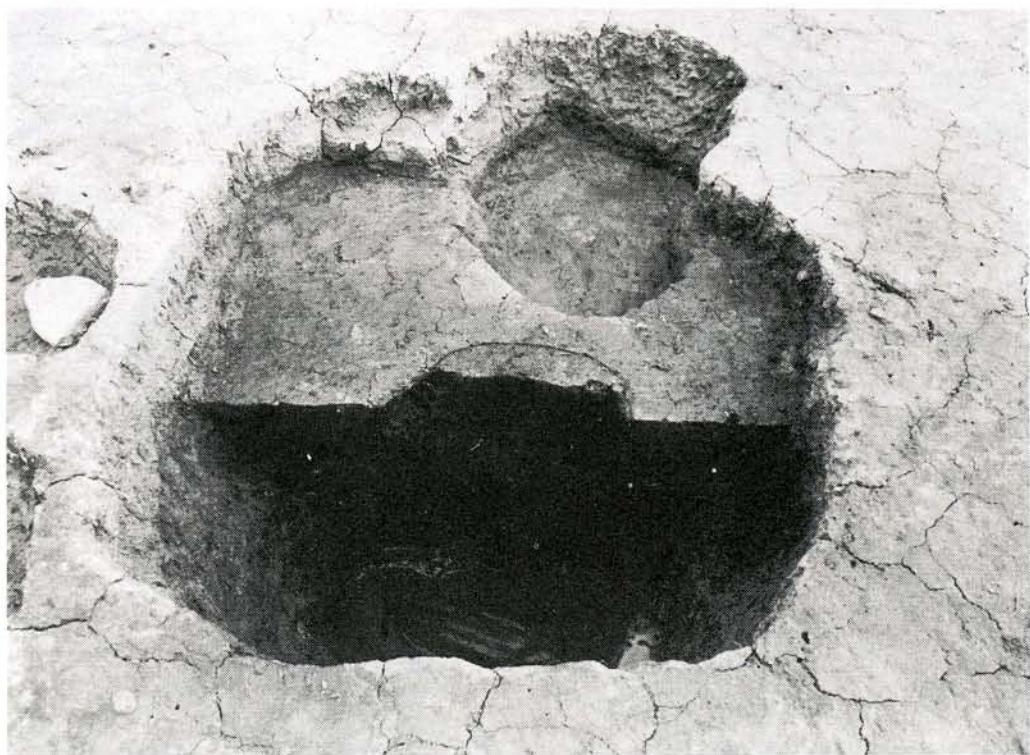
図版17 17号溝跡



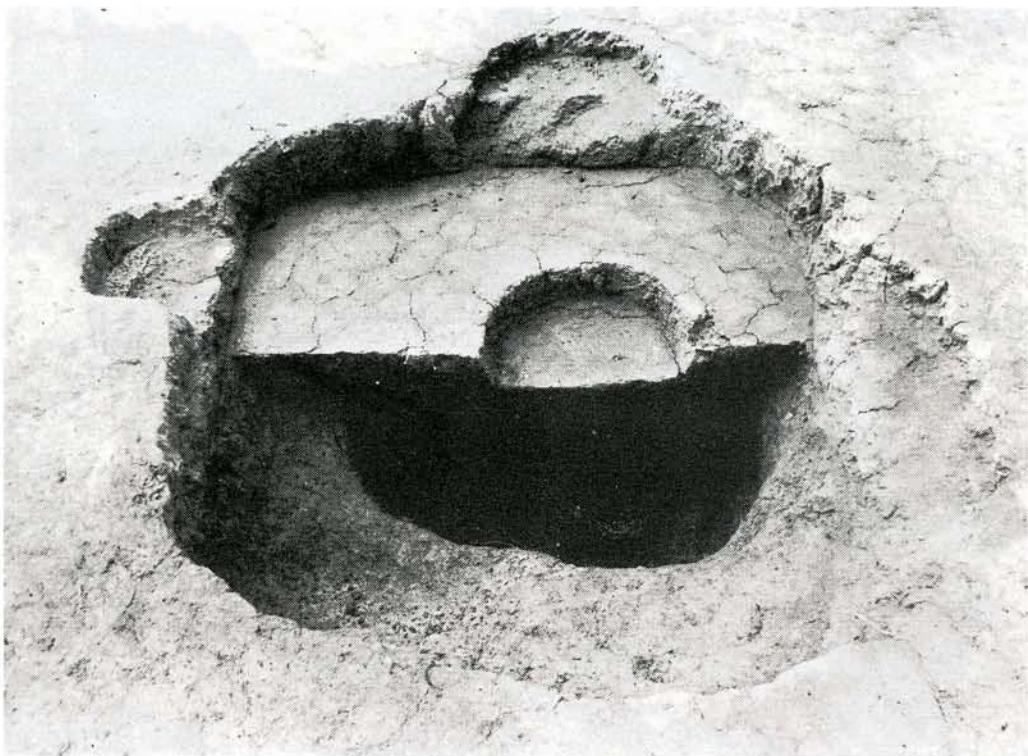
図版18 3号土塙



図版19 SB 01 建物 跡



図版20 SB 01 柱 穴



図版21 SB01柱穴柱痕検出状況



図版22 井戸跡



図版23 井戸跡遺物出土状況



図版24 堀 跡



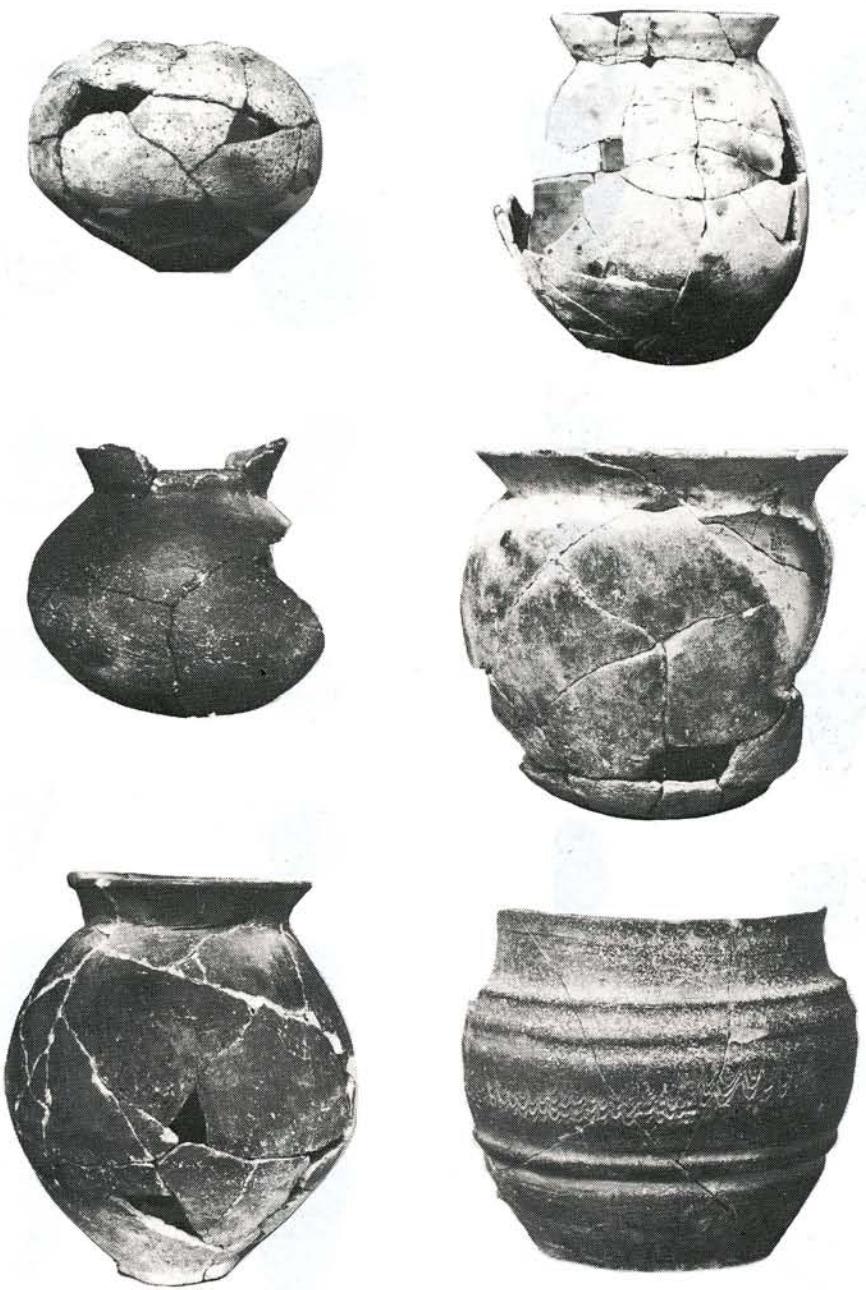
図版25 堀跡 杭列状況



図版26 堀跡 棍検出状況



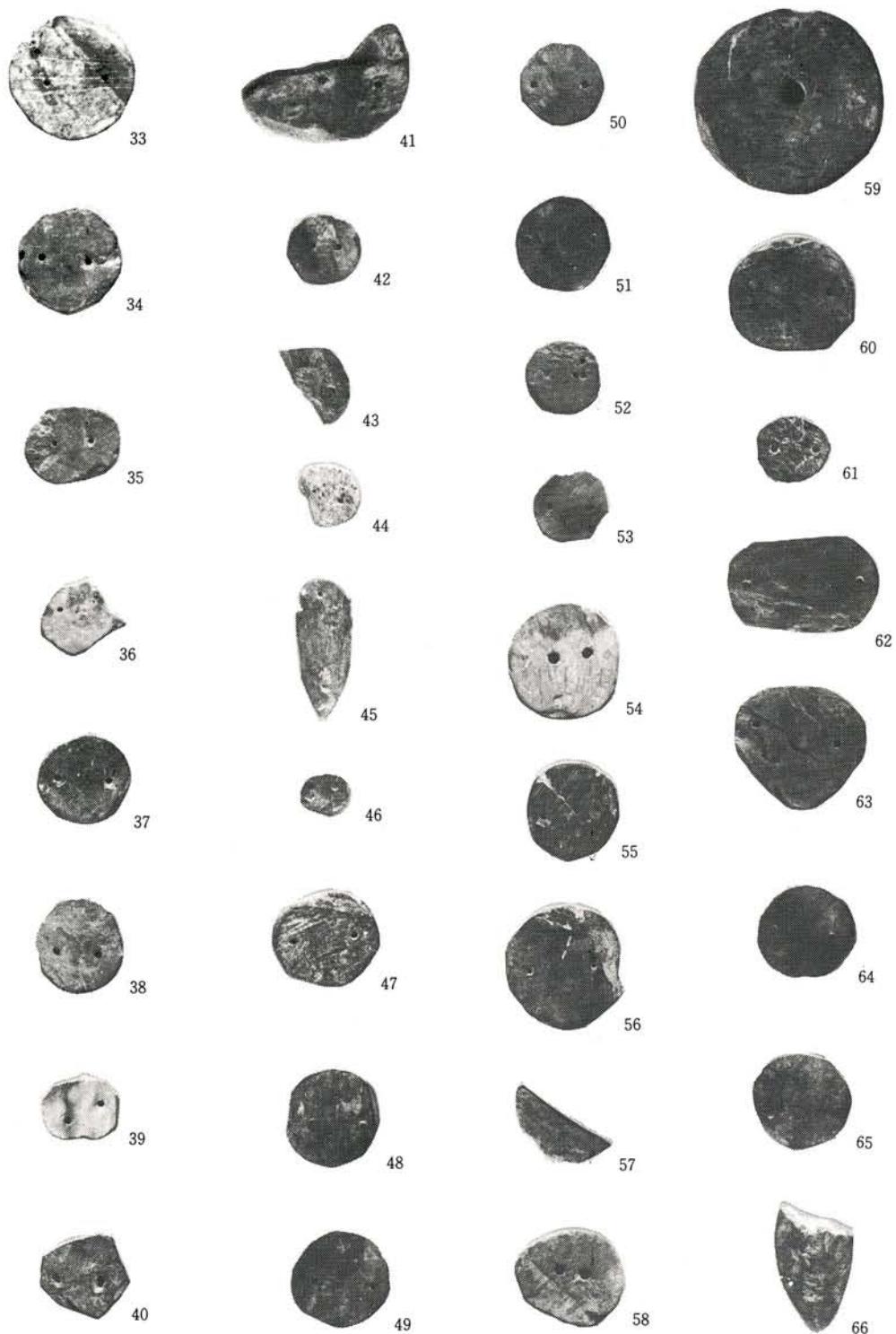
図版27 土 師 器



図版28 土師器・須恵器



図版29 石 製 模 造 品



図版30 石 製 模 造 品

高崎遺跡

(中央公園計画関連調査)

I 調査体制

1. 遺跡所在地 多賀城市高崎一丁目
2. 調査期間 昭和55年10月31日～昭和56年1月31日
3. 調査主体者 多賀城市教育委員会（教育長 玉蟲 誠）
4. 調査担当者 多賀城市教育委員会社会教育課
担当職員 （主事）高倉敏明、滝口 卓、（嘱託）白石直子
5. 調査員 石本 敬、大久保 政勝、村田 晃一（東北学院大学学生）
6. 調査協力者 多賀城市都市計画課
7. 調査参加者 伊藤 専治、菊池 善雄、伊藤 武右エ門、阿部 由之助、
桜井 喜作、鈴木 哲子、阿部 米子、後藤 はつみ、
赤間 かつ子、阿部 美智子、後藤 恵子、阿部 久子、
鶴巻 まき子、佐藤 勝子、佐藤 いなを、市川 きよ、
小幡 あさよ、高橋 静枝、佐藤 きちよ、後藤 節子、
佐藤 ももよ

II 立地と環境

高崎遺跡は多賀城市留ヶ谷・高崎・東田中にかけての丘陵部一帯にかけて所在している。この丘陵は、本市のほぼ中央に位置している。丘陵東部は既に開発が進み、ほとんどが宅地化されており、その一部には東北学院大学工学部が所在している。遺跡は丘陵の西北部に東西1200m、南北1000mと広い範囲を占めている。今回発掘調査が行なわれた区域は、丘陵西側斜面と平坦部である。平坦部は周辺の水田面と約7m程の比高差をもち、現状は雑木林である。

同丘陵から多賀城政府跡まで距離は約1000m程で、その中間には昨年発掘調査の行なわれた館前遺跡が所在している。館前遺跡は、多賀城跡外郭築地の外側に位置しているが、掘立柱建物跡や多賀城と同時期の瓦などが発見され、多賀城跡と密接な関係をもつ遺跡と考えられている。

一方高崎丘陵上には多賀城跡の附属寺院として知られている多賀城廃寺跡があり、昭和



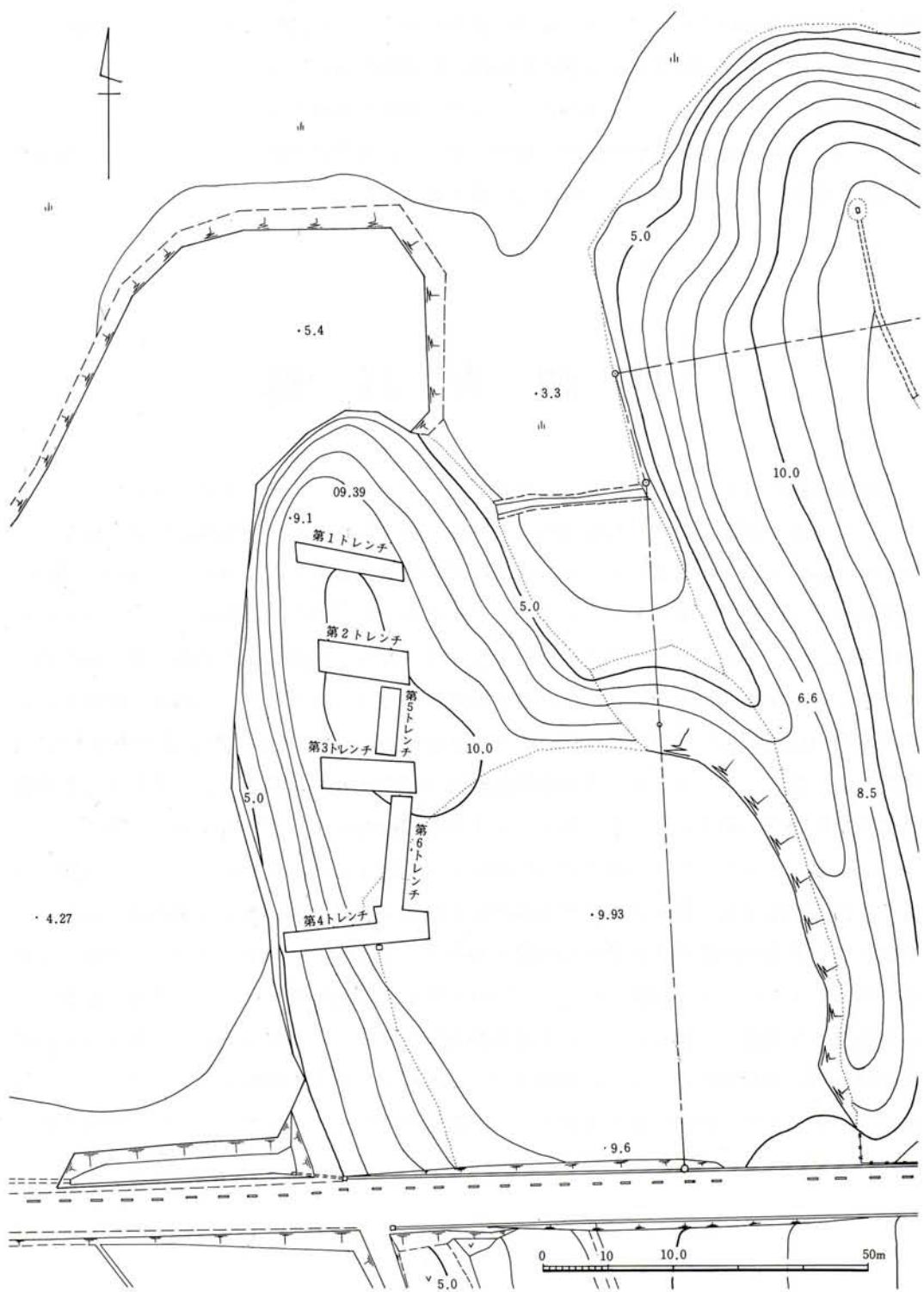
第1図 地図

38年に発掘調査が行なわれている。廃寺の西方に延びる、丘陵先端部に丸山団古墳群が存在している他、東北学院大学工学部の敷地内に稻荷殿古墳が所在している。本市における高塚古墳はこの丘陵においてのみ存在しており、貴重な遺跡である。

さらに、丘陵南端部の東田中地区に館跡と考えられる窪前遺跡も知られており、同丘陵は古代～中世にわたる遺跡をもつ重要な丘陵と考えられる。

III 調 査 経 過

調査対象地域の下草刈りを行ない、調査地区に4本のトレントを東西に設定し、バックホーにより表土剥離を行う（11月14日）。始めに第3トレントの遺構検出作業を行ない、つづいて第1・第2・第4トレントの遺構検出作業を開始する（11月20日）。新たに第2・・第3トレントの間に第5トレントを、第3・第4トレントの間に第6トレントをそれぞれ南北に、バックホーによって表土剥離を行なう。また丘陵西斜面の状況を調べるために、第4トレントを斜面裾部まで拡張し、表土剥離を行なう（11月21日）。第5・第6トレントの遺構検出作業を行ない、第6トレントの南側ベルト付近で合口甕棺1基を発見する（11月26日）。第4・5・6トレントの遺構確認面の精査を行ない第4トレントのピットの掘り込みを行なう。第1・2・4・5トレント写真撮影を行なう（12月1日）。第1・2・3・5・6トレントのピット掘り込みを開始する。第4トレントと第6トレントの間にあるベルトを排除する。第4トレント東側から小柱穴列を検出し、掘立柱建物跡の存在が予想された。実測図作成のため遣り方測量の基準グイを設置する（12月5日）。調査区全景及び第3・4トレントの撮影を行なう（12月6日）。新聞発表を行なう。実測図作成のための遣り方を設置し、各トレントの平面実測及びセクション図作成を終了、掘立柱建物跡、合口甕棺墓の写真撮影を行ない、遺構保存のため埋戻し作業を開始する（12月23日）。気象条件が悪いため、調査の継続を断念し、調査区の埋め戻しを行なって今回の調査を終了した（1月16日）。



第2図 調査区トレンチ配置図

IV 発見遺構

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡とみられる柱穴数基と甕棺1基、土壙1基である。

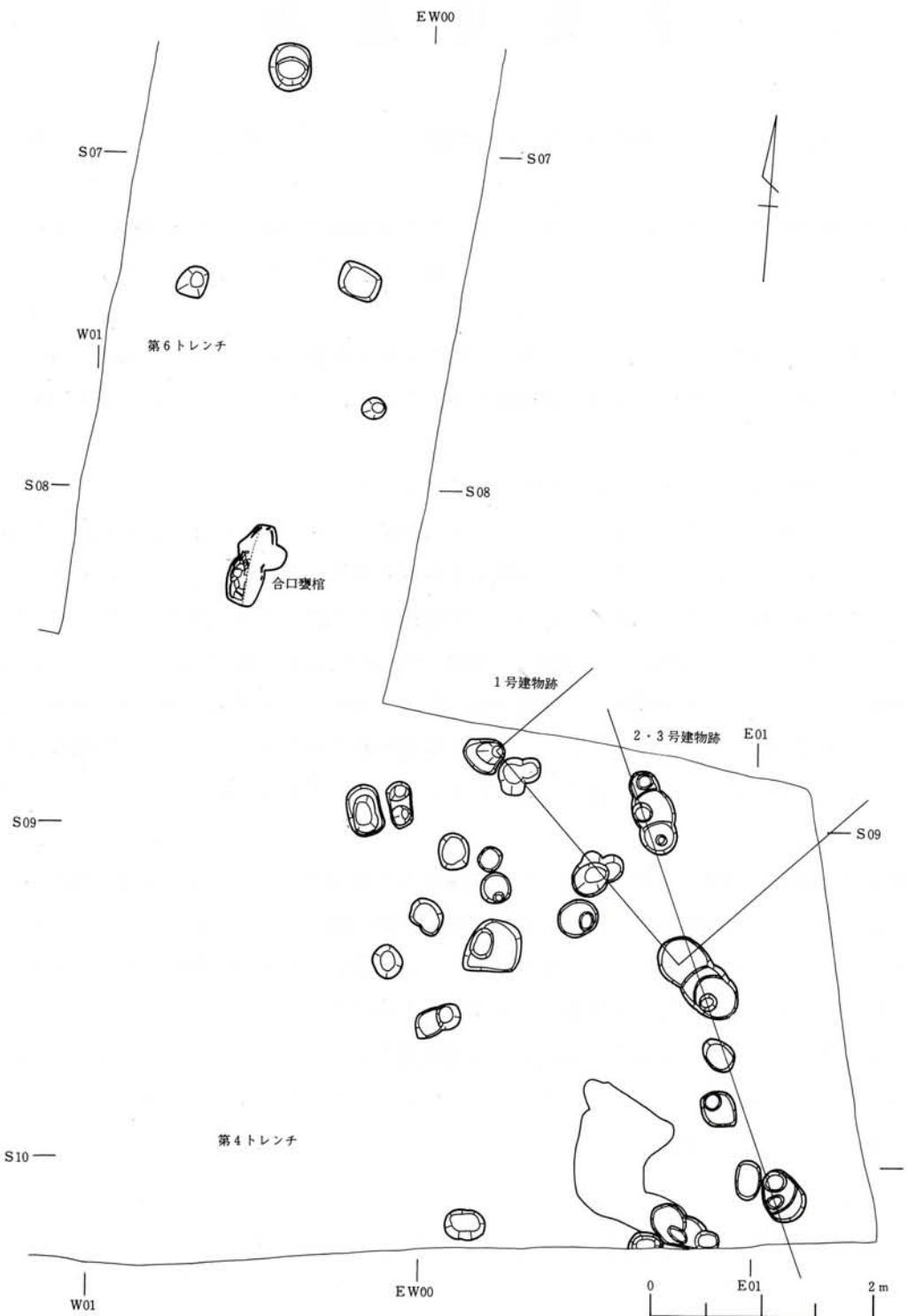
掘立柱建物跡は、市道に最も近い第4トレンチの東端部で発見された。柱穴はいずれも円形を呈し、内部に柱痕跡をもつものもある。柱穴の組み合わせから3棟の建物が考えられる。

1号建物は、西妻柱列とみられる2間分の柱穴3基が直線に並ぶ。南から115cm+120cmを計り、間尺4尺程度の小規模な建物跡と考えられる。柱穴は径30cmほどの不整円形を呈し、深さは約40cmである。

2・3号建物は1号建物の内側に検出した柱穴から想定されるもので、切り合い関係を有している。新しい方を2号建物とした。ともに設定したトレンチ内には、建物跡の一部しか発見されてはいないが、各柱穴に対応する柱列が西側に存在しておらず、おそらくトレンチの東側に延びるものと考えられる。2号建物跡の柱間寸法は、北から117cm+175cmを計り、径約40cmの円形の柱穴の中に、径16~20cmの柱痕跡が確認された。また、2号建物跡に切られている3号建物は、柱間寸法は北から190cm+200cmを計り柱穴の中には、やはり15cm程度の柱痕跡が認められた。2・3号建物跡の柱穴は、いずれも新旧関係をもつことから、3号建物から2号建物に建替えされたものとも考えられるが詳細については不明である。

甕棺は、南北に設定した第6トレンチの南端部分で発見された。2個の土師器甕の口縁部を合わせた、合口甕棺である。地山を掘り込んで横に据えており、掘り方は、甕の外形に添って、きっちりと納まるように掘り込んでいる。甕棺の全長は約70cmであり、主軸方向はN18°Eである。棺内部は未調査のため詳細は不明である。

土壙は第3トレンチの南壁に入り込んで1基発見されている。そのため、平面プランは不明である。床面は緩やかなレンズ状を呈しているが、所々木の根により攪乱されている。覆土中から土師器片が数点出土している。



第3図 遺構配置図

V 出 土 遺 物

今回の調査で発見された遺物は、土師器・須恵器・瓦などであるが、少數の破片であるため、実測図の掲載はできなかった。

遺構内から発見された遺物は、僅かに土師器片数点のみでピット内からの出土である。杯の破片がほとんどであり、底部片によると、回転糸切りで切り離した痕がみられ、再調整が施されていないものである。内面は黒色を呈し、底部は放射状ミガキ、体部は横ミガキが施されているものなどがある。

遺構外からは、土師器の杯・高台付杯・甕、赤焼き土器、須恵器杯などが出土している。須恵器の杯には回転ヘラ削り調整の行なわれているものと、回転糸切りの後再調整の行なわれていないものとが出土している。

VI ま と め

今回の調査は、中央公園計画により丘陵の一部が削平されるため、平場をもつ西側丘陵を対象として、遺構確認調査を実施した。その結果をまとめると次のとおりである。

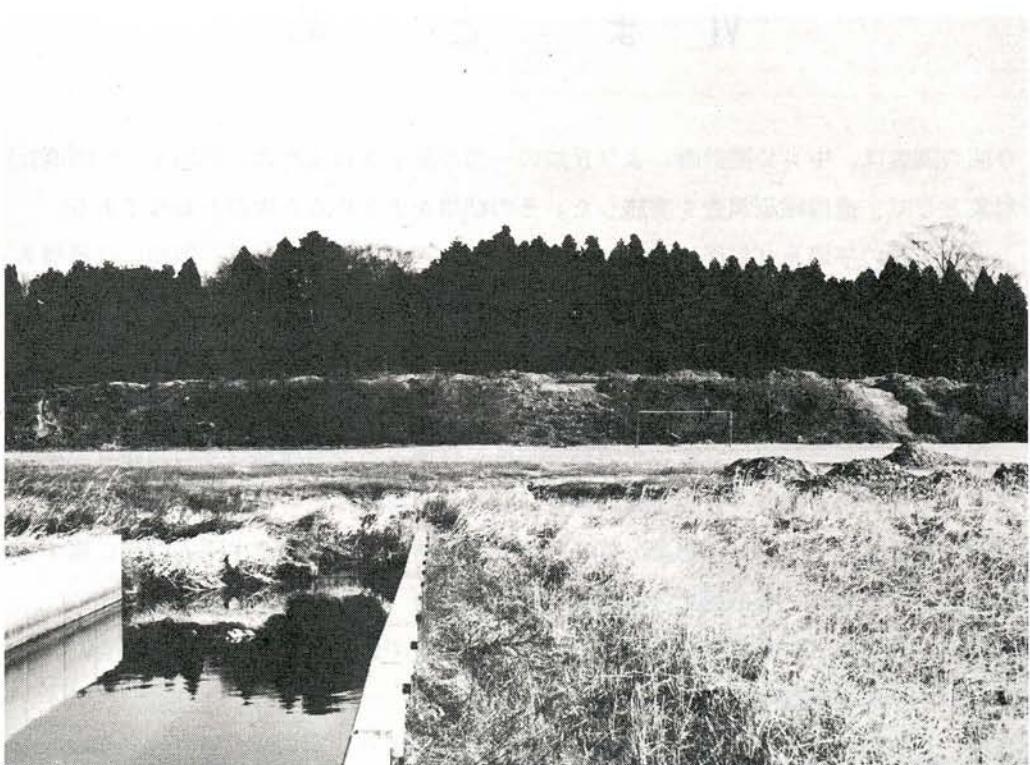
1. 西側丘陵の平場及び斜面にトレンチを設定して調査を行った結果、斜面には遺構あるいは人為的作業の痕跡は認められず、遺構は平場にのみ存在している。
2. 平場で発見された遺構は掘立柱建物跡・甕棺・土壙などで、これらは南側に集中している。
3. 掘立柱建物跡の発見は、その東方約 200m に位置する多賀城廃寺との関連を想起させ、県内でも出土例が少ない合口甕棺の発見により本遺跡の性格の特異性が考えられる。
4. 出土遺物は、土師器・須恵器・瓦などが少數であるが、いずれも平安時代に属するものであり、これは、合口甕棺の時期と一致する。

本遺跡の調査は二ヶ年継続事業として実施する予定であり、今回の調査結果を基にして56年度に本格的な調査を組む予定である。

なお、合口甕棺については、気象条件が悪いこともあり、埋め戻しを行って保存したが56年度の調査で内部の発掘を行う予定である。



図版1 調査区遠景（西より）



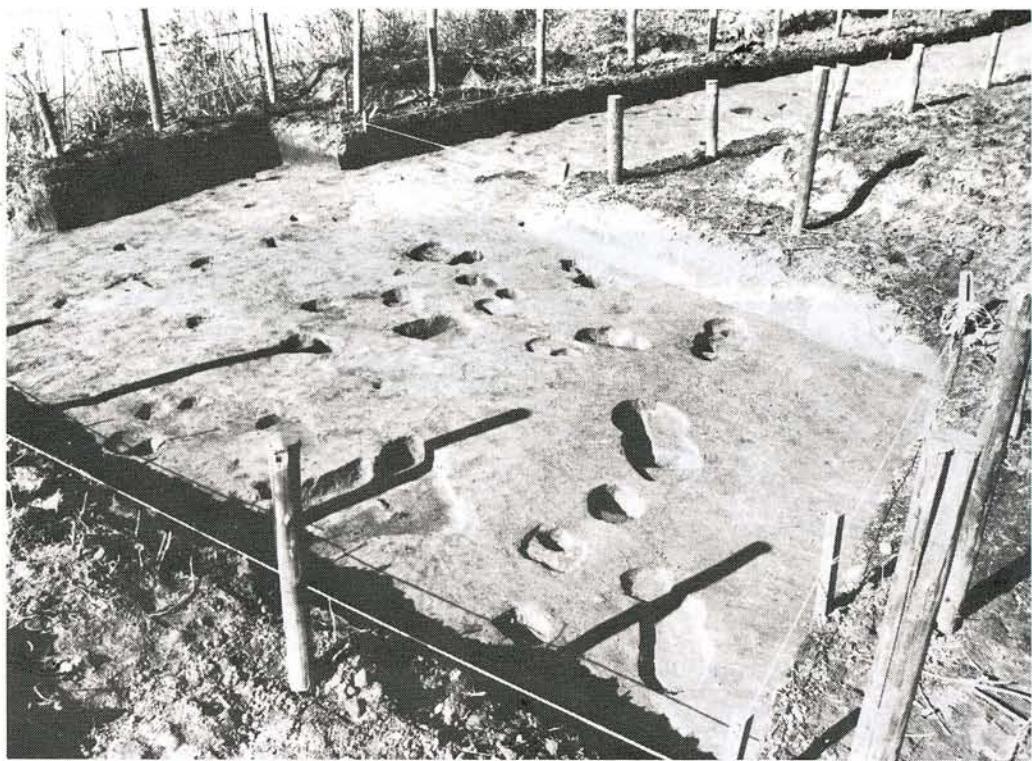
図版2 調査区全景



図版3 調査状況



図版4 第3トレンチ



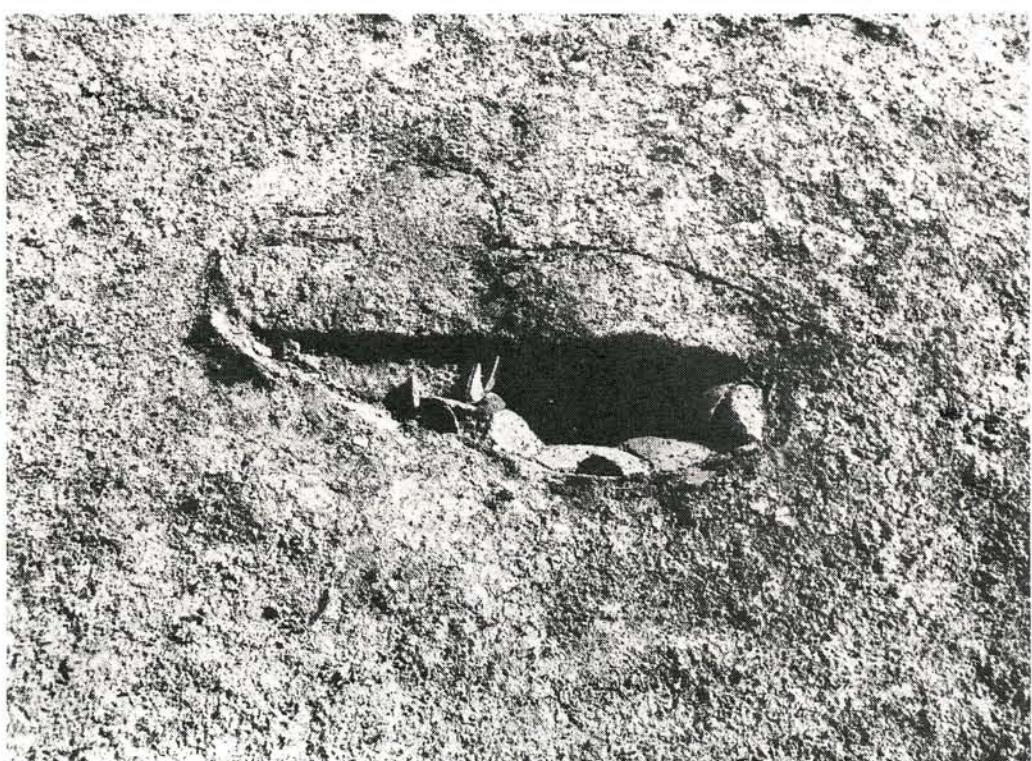
図版5 第4トレンチ



図版6 第5トレンチ



図版7 第6トレンチ



図版8 合口甕棺検出状況

多賀城市文化財調査報告書第2集

山王・高崎遺跡

— 昭和55年度発掘調査報告 —

昭和56年3月31日発行

編集 多賀城市教育委員会
発行 多賀城市中央二丁目1番1号
TEL (02236) 4-1141
印刷 渡辺印刷所
仙台市石名坂73番地
TEL (0222) 22-9520
